

「献身し、子どもを主に!」

神田川キリスト教会 二宮 一朗



イエスは…弟子たちに言われた。「子どもたちを、わたしのところに來させなさい。」
マルコ10・14

今から五十五年程前のこと。神戸市立菊水小学校の前で、子供映画会のチラシを配る人たちがいました。それを受け取って熊野教会学校へ行った子供たちの中に、私がいきました。映画会では、ディズニーの映画とムーディー科学映画が上映されました。その日を機に、私は日曜朝の教会学校へ通い始めました。休みがちで、且つ、礼拝中も十円玉を回して遊んでいた、分級中には電気コンセントをショートさせたりと、先生方を困らせる子供でしたが、ほかの所にはない愛を感じて通いました。そこは、毎週日曜に教会学校をしておられた田中光之兄・佑子姉御一家の御自宅でした。そこで私は、神様の存在を知りました。

中学生となり、紹介されて神戸中央教会に通い始

めました。同級生に誘われて行かなくなりました。そんな私に声をかけ、教会に誘い、また、市内の国際会館で開かれた神戸福音クルセードという集会に誘って下さったのは、田中兄姉の次男の真実君でした。私はそこに集い、神様から離れていた罪を悔い改め、主イエスを信じ、救いにあずかりました。信徒として「献身」し、結婚相手も奏樂ができて共に教会学校をして下さる方を選んだ田中光之兄、生涯共に教会学校教育に「献身」された佑子姉、この御両親のお姿を見て育った真実兄、これらの方々がおられなかったら、救われた今の自分はないと思うと、ゾッとします。ただただ感謝でいっぱいです。田中光之兄は、小学校の校区内では「教会学校の校長先生」として、住民に知られていました。平日は国鉄マンとして働きながら、子供たちを訪問し続けておられたからです。

現代の教会学校は、信徒の子供たちが中心と成りつつあります。しかし、教会堂の外には、主の救いを知らない多くの子供たちがおり、かつてない不安と孤独と家庭崩壊の中に魂が滅びに向かっています。私たちも、主に「献身」して祈り、教会内外の子どもたちを主のもとへお連れしようではありませんか。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
教師養成講座「旧約聖書丸ごと早わかり(5)」	3
教会の歩み	15
王たち	51
クリスマス・年末	69
牧羊ひろば(台湾基督長老教会台中健行教会)	93
カリキュラム	97
「牧羊者」のご購読・ご利用について	98
おわりに	98

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」(以上、日本キリスト教出版局)、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」(日本ホーリネス教団出版局)、イン：「教会学校さんびか」(インマヌエル教会学校部)、ふ：「ふくいん子どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」(以上、日本児童福音伝道協会)、PW：「プレイズワールド」(リビングプレイズ)

旧約聖書丸ごと早わかり(5)

鎌野 直人



はじめに

今回は、旧約聖書の預言書(十七書)を駆け足で学んでいきましょう。

「預言書」は「将来にかかわる予告」と一般的に考えられています。確かに予告やのちに成就するキリストに関する預言も含まれています。しかし、預言書は歴史のある特定の時代の人々に向かって、預言者を通して主が語られた言葉でもあります。そして、預言者の言葉と行いを通して、主が民の歴史に介入されたことを証しています。そこで、本稿では「イスラエルの歴史の中で語られた預言書」の面を強調して概観していきます。

I イザヤ書

1 内容

ユダの王宮に仕えたイザヤが八世紀後半から七世紀初頭にかけて見た幻が記されています。隣国との戦いから始まり、アッシリアに都が完全に包囲されるという激動の時代の人々に、さらにのちのバビロン捕囚後の人々に対して語られた預言がまとめられています。ダビデ王家とエルサレムに対して深い興味を持ち、来るべき王メシアについての記述も多く含まれ、新約聖書に描かれているキリストの姿を予見している預言書です。

2 分解

(1) 1～12章

イスラエルの聖者である主を侮る民へのさばきと共に、その

罪がきよめられ、シオン（エルサレム）が正義の都へと回復されるメッセージのち（1章）、回復されたシオンへと諸国民が集う幻と指導者たちの罪が記されています（2～4章）。5章以降は、イスラエルとアラムの連合軍との戦いにおいて主に信頼しようとしないう王アハズへの警告が中心となります。そして、主に信頼する新しい王の誕生と民に与えられる主の慰めが語られます。なお、神殿で聖なる主に会うイザヤの姿を通して、目が見えず、耳が聞こえない民と、火によるそこからの救いが6章では示されています。

(2) 13～27章

13章から27章にかけては、諸国への主の厳肅なさばきを通して、万軍の主こそが全世界の王であることが提示されています。そして、主のさばきとシオンにおける主の民の回復とその祝宴が、24章から27章にかけて描かれています。

(3) 28～33章

アッシリアのユダへの侵攻という状況下で、エジプトの保護下に入ろうとする王に、その愚かさと来るべき悲劇が指摘されています。さらに、正義と公正をもって国をさばく王の到来が予見され、主こそが世界のまことの王であることがこの新しい王によって示されることが預言されています。

(4) 34～39章

34～35章では、エドムが主のさばきによって荒野と化す一方で、かつて荒野であったシオンが花園となり、民が帰還するところが預言されています。36章から39章は、Ⅱ列王18～20章とほぼ同じ内容です。主への揺るぎない信頼に生きたヒゼキヤ王のゆえにアッシリア軍に囲まれたエルサレムが奇跡的に救出されたこと、そして、やがて来るべきバビロンの侵攻の預言が綴られています。

(5) 40～55章

バビロン捕囚の時代の民に向かって語られている預言が集められています。主の言葉が実現に向かって動き出すこと、主こそが唯一の神であり、天地の創造者であること、ベルシャ王キュロスを起こし、彼によってシオンの回復が実現されること、民の目を主が開かれ、諸国民も主の偉大なわざに気がつくことが記されています。さらに、イスラエルが「主のしもべ」として描かれ、その苦難を通して諸国民の不義のゆるしが実現することが予告されています。「主のしもべ」の預言は新約聖書のキリストの預言でもあります。

(6) 56～66章

シオンに帰還した民への預言が記されています。まず、主と

の契約を守り、公平と正義を行うことの重要性和主に立ち帰る者へのゆるしが語られています(56〜59章)。続いて、回復されたシオンの姿が描かれ、主の恵みの福音が宣伝され、諸国民がシオンに集まる事が預言されます(60〜62章)。最後には、新しい天と新しい地の創造によってシオンの回復が完成すると一方で、最後まで主に背を向ける諸国民に対しては最終的な審判が訪れることが宣言されます(63〜66章)。

II エレミヤ書、哀歌

1 預言者エレミヤとその時代

ユダ王国末期(七世紀後半)、ヨシヤ王は宗教改革を断行し、王国はその勢いを取り戻しました。しかし、王の突然の死以降、国は大国に振り回され、ついには晩年、都エルサレムは陥落します。この激動の時代に預言者の働きを進めたのがエレミヤです。彼は、ベニヤミンの地アナトテ出身で、ソロモン王が追放した祭司エブヤタル(1列王2・26〜27)の子孫、レビ人と考えられます。

2 エレミヤ書の概要

(1) 1章

主はユダをはじめ諸国に主の言葉を告げる働きへとエレミヤを招かれました。彼には、やがて訪れる厳粛な審判の宣告と回復の預言が委ねられます。

(2) 2〜25章

イスラエルとユダが律法を捨て、偶像バアルに従ったため、「わたしは争い、厳粛な審判を下す」と主は宣言されます。だから、主に帰れ、と預言者は呼びかけています(2〜6章)。エレミヤは主に「エルサレム神殿において説教せよ」と命じられました(7〜10章)。律法に従わなくても、神殿のあるエルサレムは決して滅ぼされはしない、と民が誤解していたからです。このままでは、心に割礼なく、主に従わない民に審判が下り、エルサレムは荒れ塚となるでしょう。

11〜20章には「エレミヤの告白」と呼ばれる詩がちりばめられています(11・1〜23、12・1〜6、15・10〜21、17・14〜18、18・18〜23、20・7〜18)。民のために祈ることが禁じられ、アナトテの仲間から敵対され、悪しき者が栄える現実を目の当たりにし、偽りの預言がびこり、主が平安を取り去られるという現実直面したエレミヤの主への訴えです。残念ながら、バ

ビロンによって碎かれるという最終宣告が陶器師と陶器のたとえをとおして下されます（18～20章）。また、諸王、指導者、預言者、祭司への主の断罪と審判の言葉が語られています（21～25章）。悪いいちじくにたとえられた民には主の厳肅なさばきが下り、70年の捕囚が彼らを待っています。

(3) 26～45章

本物の預言者は誰であるか、が26～28章のテーマです。長期間の捕囚を預言したエレミヤと二年という短い間にすべての問題が解決すると預言したハナンヤが対決し、ハナンヤの死をもつてエレミヤこそ本物の預言者であることが主によって示されます。しかし、審判が確定した時に、エレミヤはエルサレムの回復の預言を語りはじめます（29～33章）。平安を与えようとする主の計画の実現には70年という時間がかかりますが、計画が実現する時、心のうちに主の律法を記すという新しい契約を主は民と結ばれます（34章参照）。

35～45章には、ユダ王国末期の出来事が描かれています。エホヤキムは、主の言葉を守ろうとも、聞くとうもしない王として描かれています。バビロンがエルサレムを再度侵攻したゼデキヤ王の時代、エレミヤは降伏することを勧めました。しかし、王はその言葉に聞き従いません。エルサレムはついに陥落し、

逃亡しようとしたゼデキヤは捕らえられます。バビロン軍の指導者ネブザルアドンはエレミヤを釈放し、ゲダルヤをエルサレムの総督と任命しましたが、バビロンに反旗を翻す者たちによってゲダルヤは暗殺されます。一部の民はエレミヤを連れてエジプトへと逃亡していきます。しかし、主はそのエジプトが主の審判をうけること、その一方で最後までエレミヤに仕えた書記バルクが祝福されることを告げられます。

(4) 46～51章

諸国民への主のさばきの預言が本書の最後に語られています。エジプトへのさばきに始まり（46章）、小国へのさばき（47～49章）が綴られています。最後にエルサレムを破壊したバビロンの崩壊が預言されています（50～51章）。これらを通して、主こそ全世界の本当の統治者であるという預言者の信仰が示されています。

(5) 52章

付録のようにではありませんが、エルサレム崩壊の出来事が記されています。Ⅱ列王25章から取られたものだと考えられます。主の計画は確実に進み、やがて回復が訪れるのです。

3 哀歌の内容

哀歌には、バビロン王ネブカドネツアルによってエルサレム

の町が陥落したことを覚える、神への嘆きの歌が五つ収められています。「エレミヤの哀歌」とも言われていますが、聖書そのものには何も記されていません。1〜4章はヘブル語のアルファベットを各節の頭文字とした「いろは歌」の形式を取っています（3章は同じアルファベットが三節ずつ）。5章は「いろは歌」の形式はとっていませんが、アルファベットの数である22節あります。それぞれの詩において、エルサレムの町は擬人化されており、「シオン」「シオンの娘」と呼ばれています。自らの罪が原因であることは認め、神が下された審判は正しいと詩人は認めつつも、その惨状のゆえに、なぜこのようなことが、と主に訴えています。しかし、詩人がこだわっているのは、主のいつくしみです。主はその民を決して捨てられない、という確信があるからこそ、詩人は切実に主へ祈り続けるのです。

Ⅲ エゼキエル書

1 預言者エゼキエルとその時代

エゼキエルは祭司の家の出身、ダビデの側近であつた祭司ツアドクの子孫と考えられます。彼は、紀元前597年にバビロンへエホヤキン王と共に捕囚とされたグループの一員でした。ケ

バル川のほとりにあるテル・アビブに住み、捕囚の民の一人として預言しました。

本書は、ほぼ年代順に構成されており、捕囚の第5年から第25年に至る20年間に預言されたことが集められています。イスラエルへのさばきから始まって、諸国へのさばきへ焦点が移り変わります。しかし、エルサレムの崩壊の報告（32〜33章）を境に、預言は回復の幻へと舵を切ります。

2 概要

(1) 1〜24章

四つの生きものの幻を通して、主はエゼキエルを主の言葉を伝え、見守る者として反逆の民に遣わされます（1・1〜3・21）。預言者は主が命じられた象徴的な行動（瓦にエルサレムの町を書く、人糞で食物を焼くなど）を取り、国の崩壊を民に伝えます（3・22から5・17）。そして、つるぎが送られ、逃れることができた者たちさえも散らされるという災いの到来が宣言されます（6〜7章）。

エルサレムに幻のうちに連れてこられたエゼキエルは、神殿が偶像に満ちあふれ、長老たちがそれらを崇拜している姿を見ます。神殿は汚され、不義で満ちた町は捨てられ、人々は滅ぼされていきます。そして、主の栄光は神殿を離れます。しかし、

主は民を見捨ててはおられません。捕囚の地においてでさえ主は彼らの聖所となられるからです（8～11章）。こののち、象徴的な行動や比喻によってイスラエルの歴史が解説されます。ここでは、バビロン捕囚が不可避なことで、その原因である偶像崇拜が指摘され、自らの世代の罪を悔い改めるように勧められます（12～19章）。

イスラエルの偶像崇拜は今始まったことではありません。出エジプトの時から繰り返されてきたものでした。しかし、主は自らの名を惜しむゆえに厳粛な審判を止められてきたのです。しかし、もう避けられません。そこで、エルサレムの包囲と破壊を嘆いてはならない、と主は祭司であるエゼキエルに命じます（20～24章）。

(2) 25～32章
諸国へのさばきの預言です。前半（25～28章）ではユダに敵対してきたゆえに下される近郊の国々へのさばきが、後半（29～32章）ではエジプトに対するさばきが宣告されています。

(3) 33～48章
エゼキエルがイスラエルを見守る者として主によって立てられたことが再確認された後（3章参照）、バビロンによるエルサレム崩壊の知らせが預言者の元に届きます。絶望の時です。し

かし、これは回復の預言の始まりでもあります。主は、土地、民、王、神殿の再興を宣言されます。民を見捨てた悪しき羊飼いに替えて、正義のダビデの王家を立て、主ご自身がその民を養うこと（34章）、新しい霊によって民を汚れからきよめること（36章）、枯れた骨のように死に汚れた民をきよめて、多くの人を起こすこと（37章）、外国との戦いに勝利し、主の栄光が諸国民に示されること（38～39章）が綴られています。

民と王の回復に続いて、神殿の回復の幻が示されます（40～48章）。かつては偶像に満ちた神殿が（8章参照）、全く新しくなります。ひとりの人に導かれて神殿を巡ったエゼキエルは、かつては去ってしまった主の栄光が東から神殿に帰って来るのを見ます（43章）。祭司とレビ人に神殿の働きが委ねられ、種々のささげものが制定されます。神殿から水が流れ込むゆえに、死海に命が生み出されます。イスラエル12部族に土地が分割され、失われたものすべてが主によって回復されるのです（47～48章）。

IV ダニエル書

1 ダニエル書とその時代

ダニエル書は「預言書」であると理解されています。しかし、

ヘブル語聖書では本書を「諸書」の一部と見なしています。それは、本書が預言書である以上に、隠された神の奥義が民に明らかにされる黙示文学（ヨハネの黙示録が新約聖書の例）だからです。将来の出来事の細かい予告と共に、「世界の歴史は主のご計画の内にある」という中心メッセージを通して、迫害と困難の中にいる民への慰めと励ましが本書の目的です。

バビロンに捕囚の身となり、バビロンとベルシャという二つの帝国の王宮に仕えたダニエルの視点から本書は書かれています。そして、ユダ崩壊から始まり、バビロンの終焉とベルシャの興亡、ギリシャの世界征服とその後の混乱、さらには主なる神が実現される世界の歴史の完成までを視野において、隠されていた神の奥義が選民に伝えられています。なお、象徴的な表現が多く使われているために、本書の解釈には諸説があります。

2 概略

(1) 1～6章

バビロン（1～5章）とベルシャ（6章）の王宮におけるダニエルと三人の青年たちの活躍が描かれています。彼らは異国においても主の律法を守り続け、受けた迫害をも乗り越えていきました。彼らは異国の王宮の食事を食べず（1章）、金の像を拝まず（3章）、王ではなく主に祈り願いました（6章）。その結

果、様々な迫害にあいましたが、主は彼らを奇跡的に守られています。更に、ダニエルにはバビロンの王たちに主が見せた夢を解く知恵が与えられました。ネブカドネツアルに与えられた帝国と世界の将来に関する夢（2章）、高慢な王へのさばきの夢（4章）、主の神殿の器を汚した王に告げられた神のさばきと帝国の終わりの知らせ（5章）をダニエルは解釈し、解釈したとおりにものごとが現実となっていました。イスラエルの神である主こそが歴史の支配者であることが異教の地でも明らかにされています。

(2) 7～12章

ダニエルに対して主が示された幻と共に、神の使いによるこれらの幻の解釈が記されています。バビロンの王ベルシャツァルの時代には、四つの獣に関する幻（7章）と角を持つ雄羊と雄やぎに関する幻（8章）が告げられ、ベルシャとギリシャの時代が予告されています。ベルシャの王たちの時代には、主がエレミヤに告げられた「七十年後のエルサレムの回復」に関する預言の解釈（9章）、ベルシャの王に始まってギリシャの王の神の前における高慢、さらには主による歴史の完成が幻で示され、神の使いによってその幻が解釈されています（10～12章）。

V 十二小預言書

ホセア書からマラキ書に至る、比較的短い十二の預言書は「小預言書」としてひとまとめにされています。これらの書はイスラエルの歴史の広い範囲を取り扱っており、旧約聖書全体を理解する上で欠かすことができません。

1 ホセア書

八世紀半ばにイスラエル王国で活躍した預言者ホセアは王国の繁栄を目の当たりにしました。しかし、この繁栄は主に喜ばれるものではなく、王国はアッシリアによって滅ぼされます。

冒頭で、主はホセアに淫行の妻ゴメルを受け入れるよう命じました。結婚という契約によって結ばれた夫を捨てた彼女を通して、「イスラエルは主と結んだ契約を裏切ったこと」を示すためです。契約を裏切り、主を捨て、バアルを慕い求めたイスラエルには、厳肅なさばきが待ちかまえています。ですから、審判の深刻さを覚えて、今、主に帰りなさい、とホセアは訴えています（1～3章）。

続く4～11章では、イスラエルの問題がより具体的に示されていきます。彼らは主を知らず、主との契約の具体的指標である主の十戒を守っていません。それゆえに、彼らにはさばきが

用意されています。指導者である祭司や預言者が民にこのことを教えてこなかったからです。イスラエルの淫行は、アッシリアやエジプトとの同盟関係に表されています。この同盟関係はイスラエルがかつて金の子牛の偶像をつくった罪の繰り返しである、と預言者は指摘しています。イスラエルは、エジプトに帰り、アッシリアびとを王としてしまいます。それでも、愛と情熱の主は、イスラエルを捨てようとはされません。

イスラエルがアッシリアと組んで、その経済的策略に乗っていることをホセアは指摘します（12・1）。この同盟の結果、国中に不正と格差が広がっていきました。ですから、ヤコブの生涯や出エジプトについて語ることによって、主こそが自分たちの神であることをホセアはイスラエルに思い起こさせようとしています。さばきが予告されていますが、審判が主の最終的な目的ではありません。ですから、偶像を捨て、主に帰れ、とホセアは繰り返し民を招くのです（14章）。

2 ヨエル書

本書の時代背景ははっきりしていません。エルサレムに神殿があり、そこで祈りがささげられていた時代であることはわかります。

いなごによる飢饉に瀕している民に対して、主の家である神

殿で祈りをささげるように預言者は命じています（1章）。主の

日が到来し、滅びが全地に満ちるからです。しかし、いながらによる飢饉は、強力な国民によるユダの荒廃を象徴しているに過ぎません。なぜならば、続く預言（2・1～14）を読む時、主の日が大軍の到来を意味していることがわかるからです。審判の日に際して「心を裂け」と、悔い改めが勧められています。祭司たちの悔い改めの祈りを受けて、主は民をあわれみ、敵を打ち破り、雨を降らせ、豊かな実りを与え、主の霊を民に注がれます（2・15～3・21）。そして、主は諸国民をヨシヤファテの谷でさばき、彼らの流した血への報復をなされます。

3 アモス書

アモスは、ホセアと同時代、八世紀半ばの預言者であり、かつては南王国のテコアで羊飼いをしていました。著しい経済的發展を遂げていた隣国イスラエルに向かって、主が預言者を通して語られた警告が本書に記されています。

本書は四つの部分に分けられます。まず、諸外国へのさばきの預言（1・3～2・16）。イスラエルと主を侮った諸国への審判の言葉に続いて、主の律法を捨てたユダへのさばきが宣言されます。しかし、アモスの真の狙いはイスラエルの罪の指摘です。一部の富める者たちが弱者を虐げ、淫行を行い、主の預言

を止めようとしていたからです。

次に、アモスはイスラエルの罪を告発します（3～4章）。イスラエルは主を完全に捨てたわけではありません。しかし、神に特別に選ばれた国であるにもかかわらず、暴虐と圧制を放置してきました。それゆえ、主は干ばつ、飢饉、疫病、炎を送られます。しかし、彼らは主に帰ろうとはしません。そこで、神に会う、つまり厳粛な審判に備える必要がある、と主は宣言されました。

そこで、アモスはイスラエルに悔い改めを勧めます（5～6章）。公正と正義を国にあふれ流れさせよ、と主は命じました。様々な祭壇（ベテル、ギルガルなど）に行くことを禁じ、むしろ主に祈り願うことを民に要求しました。このままでは、やがて到来する主の日に暗やみが民の上に臨むからです。

アモスの見た幻と本書のまとめが7～9章に記されています。主の測りなわを前にした時、もうイスラエルの罪を見逃すことはできません。彼らの聖所ベテルは必ず荒れすたれます。このことをアモスはベテルで預言し、警告を与えました。しかし、彼の言葉が繰り返し拒絶されたので、イスラエルの捕囚を主は宣告します。食物の欠乏と主の言葉の飢饉がイスラエルを襲います。しかし、終わりの日にはダビデ家の王によってイス

ラエルに祝福を回復する、と主は約束されるのです。

4 オバデヤ書

オバデヤがどの時代の預言者であったかは明確ではありません。本書のテーマは死海東岸のエドムへの主のさばきです。「エサウの子孫であるエドムが、自らの兄弟ヤコブの子孫ユダに對して暴虐を行い、その災いを喜んだゆえ、審判が彼らに臨む」と主は宣言されます。なぜならば、エドムの審判こそがイスラエルの復興であり、このことを通してシオンで王座につかれている主が、すべての王国とその民を支配されるからです。

5 ヨナ書

本書は他の預言書と異なり、ヨナの上に降りかかってきた出来事が記されています。ヨナは八世紀半ばの預言者であり、イスラエルの王ヤロブアムによる領土拡大を預言していました(Ⅱ列王14・25)。その彼が、侵略の手をイスラエルに伸ばしてきたアッシリアの都ニネベに行つて預言するように命じられました。しかし、逆の方向にある地中海沿岸の町タルシシュへ船で彼は逃れようとしています。しかし、主は大嵐を備え、ヨナは船から海に投げ入れられます。主が備えられた大きな魚に吞み込まれたヨナは、三日三晩、その腹の中にいました。その後、魚は主の命に応えて彼を陸に吐き出しました(1〜2章)。

再度ニネベに行くように主に命じられたヨナはその言葉に従いました。四十日を経たら町は滅びるという警告を聞いたニネベの民は自らの悪しき道を悔い、そこから離れました。主は災い进行を思ひかえしましたが、実現しなかった預言を語ったことにより偽預言者の汚名を負い、契約の民であるイスラエルにのみ表されるはずの主のあわれみ(4・2)が異邦人であるニネベに對して示されたのを見たヨナは、納得がいきません。しかし、主は唐胡麻を通して諸国民に對する自らのいつくしみをヨナに示されます(3〜4章)。

6 ミカ書

ミカは「ユダの王ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ」が王であった時代、つまりイザヤと同じ時代の預言者です。しかし、宮廷に仕えたイザヤとは異なり、アッシリアの来襲によつて被害を受けたであろうモレシエテ・ガテの出身者です。預言者はまず北王国の都サマリヤがその罪のゆえに崩壊したことを述べ、それがやがて来るべきエルサレムへの審判の予表となると宣言しています(1章)。続いて、指導者たちが民のことを顧みず、むしろ虐待し、略奪していることをイスラエルの罪のひとつとして指摘しています(2章)。

続いてミカは、主の民の回復のプロセスを記しています(3

（5章）。エルサレムはその不義のゆえに罰せられ、荒れ地となること。諸国民が主の言葉求めて、シオンの山に集うこと。ベツレヘムで生まれる、ダビデ一族出身の手によって回復が現実となること。6章では、出エジプトから征服にわたる主のみわざを思い出し、公正と正義を行うように勧められています。そして、混乱している現実の中にあっても民をあわれみ、回復のわざをなしてくださる救いの神への切なる祈りをもって本書は閉じられています（7章）。

7 ナホム書

本書にはアッシリアの都ニネベの陥落の幻が記されています。612年に起こった出来事を予見して本書は、同じ町に対する主のあわれみを示すヨナ書と対照です。

主の力を侮っている者たちに主の報復のわざを思い出させたのち、ナホムは、敵はもはや襲ってこないとユダに向かって語っています。2・2以降、ニネベが軍勢に滅ぼされていく姿が記述されていますが、「見よ、わたしはおまえを敵とする」の表現からわかるように、厳粛な審判は、彼らが侮っていた主によるものであることが強調されています。

8 ハバクク書

バビロンの侵攻についてのハバククと主との対話が記されて

います。悪人によって義人が虐待されている現実を訴えたハバククに対して、主はカルデア人（バビロン）を起こすと宣言されます。しかし、邪悪なバビロンを主が用いられることに疑問を呈した預言者に対して、正しくない行いをしているバビロンも最終的には主に滅ぼされる一方で、「正しい人はその信仰によって生きる」と語られます（1・2章）。3章にはハバククの祈りが記されています。速やかに変化しない状況の中で、ふさわしい時に必ず行動を起こされる主への信頼によって預言者は力をいただきます。

9 ゼバニヤ書

ゼバニヤは、ヨシヤがユダの王であった時代の預言者です。彼はハバククと時代をほぼ同じとします。主の日の到来によって、ユダにいるバアル崇拜者に対して厳粛なさばきが下されます（1章）。そこで、主の激しい怒りから逃れるために主と正義と謙遜を求めよ、と命じられたのち、ユダを虐待する諸国がやがては荒野となることが預言者によって述べられています（2章）。預言者の矛先はエルサレムに向けられ、高ぶった指導者たちへの警告が語られます。しかし、主はイスラエルに懲らしめを与えることによって、彼らを謙遜な民と造り変え、その間に住み、幸福と誉れとを回復されると約束されます（3章）。

10 ハガイ書

バビロン捕囚から帰還した後、ペルシャ王ダレイオスの治世（520年）に語られた預言が記されています。まず、主の家（神殿）を再建することに着手するならば、雨と収穫の祝福は主から与えられるという預言（1章）。勇気を出し、再建に取り組めば、万国の民がその栄光を見て、貢ぎを携える約束（2・1～9）。最後に、神殿の再建によって国がきよめられ、総督ゼルバベルの地位を堅くされることが預言されています（2・10～23）。

11 ゼカリヤ書

ハガイ同様、ゼカリヤも神殿再建に取り組んでいる民へ主の言葉を伝えました。

まず、1～8章には主が示された幻が記されています。主は預言者によって語られた言葉を実現されてきたことが示された後、ゼカリヤは8つの幻を綴っています。それらは、神の馬、四つの角、測りなわを持つ人、大祭司ヨシユアの任命、燭台と二本のオリブの木、飛んでいる巻き物、エパ升の中の女、四台の戦車です（1・7～6・15）。これらを通して、神殿の再建、主の臨在の実現、聖なる指導者たちの擁立、そして律法による正義の確立が約束されています。幻ののち、預言者の言葉に従うことの必要性が語られ、やがて来るべき国家の回復と諸国民の来訪

が預言されます（7～8章）。

続いて、二つの宣告が集められています。最初の宣告では、愚かな牧者たち（王）へのさばきと、主自らが牧者となってその民を養うことが記されています（9～11章）。二つ目の宣告では、主がダビデ家から王を興し、エルサレムに光栄を与えられる一方で、諸国民がエルサレムを攻撃する様が描かれています。しかし、主自らが勝利をえられた結果、万民はエルサレムで仮庵の祭を守ります（12～14章）。

12 マラキ書

神殿とその祭儀を軽率に扱わないようにとの忠告が、本書を通して民と祭司に与えられています。5つの論争、つまり神の愛、適切に行われていない神殿祭儀、レビをきよめ、悪しき者をさばく主の日、十一のささげものの重要性、正義が実現する主の日の取り扱われています。そして、律法の遵守と主の日の到来を備える預言者エリヤの来訪を予告し、旧約聖書はその幕を閉じます。

（※「牧羊者・二〇〇七年度Ⅱ巻」に掲載されたものを、一部再編集し掲載しました。）

聖書

使徒3・1～10

タイトル

キリストの名による歩み

暗唱聖句

ナザレのイエス・キリストの名によって
立ち上がり、歩きなさい。 使徒3・6

目標

キリストによって力強くされて生きる。

導入

(和田牧子)

「名は体をあらわす」ということばを知っていますか？
「名まえがその人の中身や性質をあらわす」という意味です。めぐみちゃん、美晴ちゃん、はやとくん、栄人くん…皆さんのステキな名まえがどのようにつけられたのかぜひ教えて下さい。さて、今日はイエス様のお名まえには特別な力があることをお話しますね。

足が不自由な人の悲しみ

神様を礼拝する宮には「美しの門」という場所がありました。その門の前にひとりの足の不自由な人が座っていました。およそ40才の人でした。生まれた時から足が不自由だったので、何十年もこの場所に通っていました。通うと言っても一人では来られないので、だれかに運んでもらって、そこに置いてもらっていたのです。そこで

何をしていたかという、道行く人にお金をもらっていたのです。その日暮らしていけるお金をもらうこと、それがこの人のただひとつの望みでした。

この人の心の中はどんな気持ちだったでしょう。もしかしたら自分の人生とはこんなものだと、あきらめていたかもしれません。自由に歩けること、自分の力で仕事をしてお金をもうけること、そのあたりまえのことができない悲しみはその人にしかわからないものだったでしょう。

私にあるもの

午後3時、ペテロとヨハネが神さまにお祈りをするために宮にやってきました。この足の不自由な人は二人が宮に入ろうとするのを見て、「どうかお金をいただけませんか？」とお願いました。

するとペテロはヨハネと一緒にその人をじっと見つめて、「私たちを見なさい」と言いました。その人はおどおどして、目を合わせずに声をかけていたのかもしれない。彼は「何かをもらえるのかな？」と期待して、二人に目を注ぎました。何をくれるのか、じっと注目したのです。そんな彼にペテロは言いました。「金銀は私には

ない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい！」金や銀といったお金は私たちは持っていない。しかし「私にあるもの」をあげましょう…とペテロは言ったのです。そしてペテロは彼の右手をとって、立たせました。するとどうでしょう。たちまち彼の脚と足首の骨が強くなり、踊りあがつて立ち、歩き出したのです。彼はピヨンピヨンと飛んだり跳ねたりしながら、神様を賛美し、ペテロとヨハネといっしょに宮に入っていました。この人がどれほど嬉しかったかがわかりますね。お金をくれるかうれいなか、それだけを願ってペテロたちに声をかけたのに、その結果は思いがけない展開でした！

主イエスの名による力を信じる

宮にいた多くの人たちは、いつもこの人が座って物乞いをしていたのを知っていたのでしよう。彼が踊りながら神様を賛美しているのを見て、物が言えないほどびっくりしました。そんな人々にペテロは言いました。「あなたたちが十字架につけたイエス・キリストは神様によってよみがえられました。私たちはそのことの証人です。イエス様のお名まえを信じる信仰によって、神

様がこの人を強くし、このとおり完全なからだにしたのです！」ペテロやヨハネがすごいのではない。生きて働いておられる神様がこのことをなさったのですよとお話ししました。

ペテロやヨハネが持っていたものはお金ではなく、信仰でした。イエス様のお名まえによる力を信じて祈るときに、私たちの思いをはるかにこえた神様の最善のご計画が起るという信仰だったのです。

結び

さてイエス様の名によって歩くとは、私たちにとっても、大切なことなのです。毎日お家や学校でいろいろなことがあるでしょう。ハラハラドキドキするようなことも起るでしょう。そんな時、イエス様のお名まえによってお祈りしましょう。「イエス様のお名まえ」とは、インマヌエル：「主がともにおられる」という意味です。ともにいてくださるイエス様に頼りながら、その大きな力を信じて、どんな時も立ち上がり一歩をふみ出しましょう！

♪金銀はわれにない♪（イン95）

聖書 使徒3・1～10 テーマ キリストの名による歩み

序論

(石田高保)

私たちは生きている限り、自分のためだけでなく、誰かのために役に立ちたいと思います。誰かの役に立っていると自覚できる時、生きる喜びを感じるものです。クリスチャンは、人の役に立つだけでなく、内におられるキリストによってその人を生かす力が与えられているので、生きる希望と力をお分ちすることができず。

一、神は希望を与えようとしておられる

〈生れつき足の不自由な人が運ばれて来た〉、4・22では四十歳あまりの人とあります。何十年も物乞いをして暮らしてきました。この個所を見る限り、彼の唯一の望みは、その日食べていけるだけのお金をもらうことだったようです。この後すぐに自分が歩けるようになることなどは、夢にも思わなかったでしょう。目に見える世界がすべてでした。私たちの中にも、この男性のように将来を自分で見限っている人はいないでしょうか。未来に希望が抱けず、不安や諦めが横たわっていることはな

いでしょうか。あるいはそういう人が身近にいないでしょうか。しかし未来を決して小さく見積もらないようにと願います。神さまは私たちの生活と生涯に丁寧に関わっていて下さり、たとえ困難な出来事に会っても、それを決して無駄にはせず、困難を越えて新しい展開をして下さると期待できます。

〈ペテロは、ヨハネとともにその人を見つめて〉、二人は、人生を諦め希望を失ったこの男性を見たとき、内側から憐みの心と、イエス様なら何かをしてくださるに違いないという信仰が湧きました。彼らはしゃがんで、この男の人と目を合わせました。苦しんでいる人を上から見下ろすのではなく、彼よりも低い立場に身を置いて、理解しようとした（アンダースタンドは低く立つと書きます）。このことは私たちが身の周りの人（まわりの人）とのように接すればよいかを教えられます。自分に悩みを打ち明けてくる人に対して、私たちは自分の経験したことであるかどうかに関わらず、共感できるように祈りつつ耳を傾けましょう。それはすぐにアドバイスするのではなく、自分の経験したことのない苦しみにあることで相手の人を尊敬しましょう。ただひたすら聴くためには、自

分の思いを十字架に付ける必要もあるでしょう。

この男性は、ペテロとヨハネとが「私たちを見なさい」と、自分に声をかけて来たので、よほどたくさんのお金を施してくれるのではないかと期待しました。しかし「金銀は私にはない」という言葉にがっかりしたはずです。ところがペテロはこの男性にとって、お金よりはるかに価値のあるもの、彼の問題を根本的に解決する唯一の良いものを提供しようとしていました。それは彼がイエス様を信じて、生きる希望を持つことであり、さらに歩けるようになり、自分で生計を立てられるようになる道です。私たちは身の周りの人の当座の問題が解決されるように祈る共に、その人の魂が救われるという根本的な解決を求めていきたいと思っています。

二、神は人をおして働かれる

〈ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい〉、この言葉を聞いたとき、イエス様ならこの自分を救ってくださる、いやしてくださるに違いないという信仰を働かせました。これについてペテロは解説しています。〈どうして、私たちが自分の力や敬虔さによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか〉

と、自分の能力ではないと言い切っています。「このイエスの名が、その名を信じる信仰のゆえに、あなたがたが今見て知っているこの人を強くしました。イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの前で、このとおり完全なからだにしたのです」(3・16)。

〈イエスの名〉とは、復活して生きておられるイエス様の臨在という意味です。 私たちもお祈りをした最後に「イエスの名」によって祈りますが、それは今ここにおられるイエス様により頼んで祈るという意味です。「二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです」(マタイ18・20)、イエス様の名前には力があります。 私たちもこれほどの力があることを信じて、イエス様の名前で祈りましょう。ときには人に対しても声を出して祈ってあげましょう。 事実、この出来事のように、生まれながら四十年間、歩くことのできなかった人が、飛び跳ねるほど瞬間的に癒されたのですから。

結論

あなたも、〈私にあるものをあげ〉ることが出来ます。それはわたしの内に生きておられるイエス様の力です。 私たちはこれを人々に差し出すことができるのです。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 午後三時の祈りの時間 タベのささげもの時(出エジプト29・39以下)に続いて行われる祈りのとき。ユダヤ教では一日に3度祈りの時が定められている。使徒たちは、ペンテコステの後も律法を守り、ユダヤ人と同じように神殿での礼拝や祈りの時に集っていた。

2 生まれつき足の不自由な人 「生まれつき」直訳では「母の胎から」。この男の素性については知られていないが、「四十歳を過ぎていた。」(4・22)といわれている。運ばれて来た とは、新成人してからかかえられてきたとしても20年あまりの歳月を運ばれ続けられてきたのであろうか。少なくとも、この男はここで体の癒しを望んではない。

3 5 ここにおいては「見ること」に注目して黙想したい。

3 見て 見る、認める、気づく、といった、ごく普通の「見る」という言葉。

4 見つめて バウアーは「緊張して何かに、あるいは

誰かに視線を向けて見ること」と説明する。使徒行伝の別の箇所では「にらみつけて」(13・9)と訳している。奇跡物語でよく用いられる言葉であり、ペテロの権能が宿った、力のこもった視線であった。

5 目を注いだ 見つめて(新共同訳)、注目した(口語訳)。しっかり捉える、自分の力の中に保持する、というニュアンスを持つ言葉。何らかの精神的な働きに心を向けるという意味を持つ。

このように3・5節には、それぞれ異なった「見る」という言葉が用いられており、それらの相違による登場人物の心の動きを思いめぐらすだけでもこの個所の黙想が豊かにされる。

6 金銀は私にはない ただ単に持ち合わせがなかったということもあるかもしれないが、2・44以下の、いわゆる私有財産の放棄ということも併せて理解することもできる。そして、その後に続くこの物語全体のピークへの序論ということもできる。イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい この箇所は、この物語全体の重要点である。後のペテロの説教の中で、ペテロは幾度となく「名」という言葉を用いてこのしるしの本

質を語っている(3・16、4・10、12)。ここでは、イエスの「名」とは、ただの記号ではなく、人を強くし、また救いようとする所の「実体」である。まさに「イエス・キリスト」の実在そのものであるということが出来る。特に、ルカは「イエスの名」による奇跡を強調する。この名に救いがあるのである(使徒4・12)。キリストの名を呼ぶこと、その名を唱えることが意味を持つのである。この名に基づいて神が働かれるのである。使徒の働きは、この名に基づいて神が働かれた歴史である(3・6、4・7、10、12、30、10・43、19・13)。

7〜8 ペテロは、ただ前節のように命じてそれっきりではなかった。彼は、自ら手を伸ばして彼の右の手を取って立ち上がらせたのである。ここは重要である。私たちは、御言葉を語りっぱなしであってはならない。御言葉を語ったならば、今度はその御言葉が成就するように行動しなければならないのである。もしペテロが彼の手を取って起こすことをしなかったらばどうであつたらうかと考えることも、説教を豊かにする秘訣である。しかし、ここで彼の体を立ち上がらせたのは、紛れもなくイエス・キリストの「名」であることを忘れてはなら

ない。

8 躍り上がって立ち、歩き出した 躍り上がるとは、雄鹿のように飛び跳ねる様子を描き出しており、イザヤ35・6の預言の成就を示唆している。そして、**神を賛美しつつ二人と一緒に宮に入って行った** 物乞いをしていた男が祈る者とされたのである。この男の奇跡のクライマックスがここにおいて起こるのである。障がいを負っていた彼に対して閉ざされていた神殿に入るのである(レビ21・18〜20)。癒された後、彼はもとの生活へと戻っていったのではなく、その生命が新しくされ、新たな生涯、祈りと賛美の生活が開かれたのである。イエスの「名」とは、ただ単に癒されたというにとどまらず、救いと新しい生命へと人々を招き入れる「名」なのである。

10 **ものも言えないほど驚いた** 新共同訳では「我を忘れるほど驚いた」とあり、驚きの度合いがうかがえる。

参考図書 加藤常昭編訳「説教黙想集成3 書簡」(教文館)、日本基督教団出版局編「説教者のための聖書講解使徒行伝」(日本基督教団出版局) 他

聖書

使徒5・1～11

タイトル

アナニアとサツピラ

暗唱聖句

教会全体と、このことを聞いたすべての人たちに、大きな恐れが生じた。

使徒5・11

目標

神を正しくおそれ、真実な生活を送る。

導入

(和田牧子)

イエス様がよみがえられて天に昇られたあと、聖霊がくだり教会が誕生しました。この時代、たくさんの人たちがイエス様を信じ、その人たちは心をひとつにして、持ち物をぜんぶ分けあって生活していました。土地や畑、家を持っている人はそれを売ってお金にし、必要に応じて教会のみんなに分けるようにしていたのです。ところがある時大事件が起こりましたよ！

アナニアの罪

アナニアという人がいました。彼は妻のサツピラといっしょに、自分の土地を売りました。手に入れたお金を見ているうちに、欲が出てしまいました。これをすべて教会に渡してしまうのはもったいないと思ってしまっ

たのです。それで妻と話しあって、代金の一部だけを教会に持っていきました。そしてペテロをはじめ使徒たちの足もとにお金を置いたのです。

それを見たペテロは言いました。「アナニアよ。なぜあなたはサタンに心をうばわれてしまったのですか？ 聖霊なる神様をだますようなことをしたのですか？ 土地の代金の一部を自分のためにとっていますね。」

この言葉を聞いたとたん、アナニアは急に倒れて、死んでしまったのです。これを見ていた人々はびっくりしました。そしてあらためて、神様はすべてを知っておられることを思い、恐れ of 気持ちでいっぱいになりました。教会の若者たちが立ち上がり、アナニアのからだを布で包み、運び出してお墓に葬りました。

サツピラの罪

さて、そのあと3時間ほどしてアナニアの妻サツピラが入ってきました。サツピラはまさかアナニアが死んでしまったとは知りもしませんでした。ペテロは彼女に聞きました。「あなたがたは、土地を私たちのところに持ってきたこの値段で売ったのですか？」彼女は答えました。「はい、その値段です。」それでペテロは彼女に言いまし

た。「なぜあなたの方夫婦は、心をあわせて聖霊なる神様を試すようなことをしたのですか？ 見なさい。あなたの夫をお墓に葬ったひとたちの足が戸口まできていますよ。今度は彼らがあなたを運び出すことになります。」ペテロはこう言いながらもとても残念な気持ちだったでしょうね。何とかサツピラだけでも、心を入れかえて本当のことを言ってくれたら…と思ったことでしょう。しかしいつわりを言ったサツピラもまた、すぐさまペテロの足もとに倒れて、死んでしまったのです。教会のみんなと、このことを聞いたすべての人たちは、大きな恐れでいっぱいになりました。

すべてをご存じの主

この出来事を聞いて私たちもまた、恐れのお気持ちでいっぱいになりませんか？ 神様ってほんとうにすべてのことをお見とおしなのですね。この全世界、全宇宙を造られ、私たち人間をも造られた神様ですものね。私たちの心の中すべてをご存じな方です。

それでは神様は、アナニアやサツピラのようなズルい心をもった人、サタンに心を渡してしまった人をピシビシ裁きたくてたまらない方なのでしょうか？ いいえ、

神様はどこまでも私たちが神さまに立ちかえるように、心を入れかえて「ごめんなさい」と言えるように待ってくださいっている方です。人には言えないような汚れた心、弱い心をもつ私たちのために、イエス様は十字架にかかって死んでくださいました。私たちが、罪の心でいっぱいになって、心むなしく生きることがないようにと。罪から自由になって心に平和がおとずれるようにと。

結び

このアナニアとサツピラの出来事はイエス様を信じて歩んでいく私たちにとっても大切なことを教えてくれます。イエス様を信じていてもサタンに心をうばわれてしまう危険性があること。だからこそ、いつも天の父なる神様を見上げて、主イエス様の十字架のお苦しみを忘れずに歩むこと。弱くおろかな私たちだからこそ、自分のがんばりではなく、聖霊の導きにしがたって生きていくことなのです。イエス様を証しするとは、言葉だけではなく、私たち自身の生き方そのものがイエス様をあらわしていくのですから！

♪主がわたしの手を♪（新聖歌474、ホ89、PW97）

聖書 使徒5・1～11 テーマ アナニアとサツピラ

序論

(石田高保)

聖霊降臨を経て新しくされた信者の群れは、心も思いも一つにしましたが、経済的な面においても、それぞれの持ち物を共有するような驚くべき一致を見ようになりました。これは上からの恵みに応答し、それぞれが自発的にしたことです。たとえ群れの相互扶助や宣教のために自分の財産をぜんぶ処分しなくても、他のメンバーから責められる性質のものではありません。まったくの自由意志で、強制されるものではありませんでしたが、偽りの心で金銭を提供するメンバーも出てきました。それが、このアナニアとサツピラという夫婦です。

一、神を欺く心

彼らは所有していた土地を売却し、群れの必要のために提供しようとしていました。それ自体はほめられるべきことですが、罪が隠れていました。それは売却代金の一部を自分の懐に取っておきながら、残りのお金を差し出して、これが自分の財産のすべてであると偽ったからで

す。ペテロは聖霊によって見抜き「あなたはサタンに心を奪われて聖霊を欺き」、さらに「あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ」とまで宣告します。

聖書によれば献げものや施しは、「いやいやながらではなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりに」する筋のものです(Ⅱコリント9・7)。つまり神様は、与えようとする人の動機に関心を持っておられることになります。彼らの場合は惜しむ心がせつかくの善行を汚してしまいました。たとえ良い行いであつても、いやいやながらとか、罪悪感を味わいたくないからとか、見返りを期待する動機なら、それは神への香ばしいいけにえとはなり得ないでしょう。

厳肅なことに、ペテロの叱責の言葉が終るやいなや、アナニアはその場で倒れて息が絶えてしまいました。妻のサツピラも夫と口裏を合わせて偽り通したため、まったく同じ目にあっています。

二、神を畏れる心

二度も同じことが起きたということは偶然ではなく、罪に対する神のさばきがただちに下ったということですから。彼らはうつかりしていたのではなく、共謀して神を

欺いた確信犯です。当然、悔い改めるようにとの聖霊の促しも受けたはずです。それにもかかわらず自分たちの意志を押し通したのです。彼らは（心を合わせて主の御霊を試みた）と断罪されています。初代教会の聖霊の著しいお働きの中で、教会コミュニティの聖さを保つため、神に打たれるような事態が起こったようです。しかしこの時代でさえこのようなことが頻繁に起こったとも思えません。またこういうことが現代の教会にも起こることも考えにくいことです。しかし神が心の内をすべてご覧になることを見て、神を畏れるべきことを教えられます。「神のいつくしみと厳しさ」（ローマ11・22）をバランスよく覚えたいと思います。教会コミュニティに走ったこの激震をクリスチャンたちは教訓としたことでしよう。

しかしこの辺の適用は慎重を要します。私たちの罪に對する神のさばきはキリストの十字架において完了しており、悔い改めるなら一瞬で赦されるので、罰を受けることはありません。「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」とあるとおりです（ローマ8・1）。自分が何かの困難で苦しんでいても、それを神の裁きと考えることは厳

に慎まなければなりません。神様が罰を加えることはないからです。しかし罪を自覚しながらも、それを楽しんでいたり、手放さなかつたりしていつまでも悔い改めないでいるならば、悔い改めを迫ります。神様が無制限に寛容な方であると高をくくめることは賢明ではありません。なぜなら「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません」とあるからです（ガラテヤ6・7）。しかし神様は私たちが少しでも早く、自発的に悔い改めることを願っておられるのです。

結論

アナニアとサツピラのように、私たちも罪を犯したら罰を受けることはありませんが、神が私たちの思いと言葉と行いとをぜんぶ見ておられるという畏れは持つべきでしょう。人に言えないような罪を行っていたら、ただちにそれを悔い改めて赦していただきましょう。自分では手に余る場合には信仰の友に立ち会ってもらって悔い改め、その人に赦しを宣言してもらい、関わってもらうのもよいでしょう。「互いに罪を言い表し」とあるように、説明責任を負い合う関係を持っていると誘惑により強く立ち向かえるようになるからです（ヤコブ5・16）。

研究資料

(宮澤清志)

ペンテコステ以来、教会は目に見えて成長していった。歩けない人を歩かせ、大胆に神の言葉を語っていった。その人数も120名(1・15)から三千人(2・41)になり、そしてこの物語の直前には五千人ほど(4・4)になっていた。しかし、このような時こそサタンの働く機会となる。サタンは巧妙に教会の内部からその魔の手を伸ばしていた。

テキスト

1〜2 承知のうえ この両者の罪深い要素の一端がここに垣間見える。いわゆる「出来心」ではなく、**両者とも承知のうえで**、という事実である(口語訳聖書では「共謀して」となっており、こちらの方がニュアンスをよくつかんでいる)。あらかじめ両者は打ち合わせたうえで、という意味が含まれる。

1 アナニア 「主は恵み深い」という意味の名である。当時のユダヤではありふれた名であったようである。サッピラ 「美しい」という名。

2 取っておき 口語訳は「ごまかし」であり、着服す

るという意味が含まれている。なお、七十人訳聖書では、この語はヨシユア7・1のアカンに対して用いられている。

3 ここでペテロがアナニアに対して問うていることは、①なぜ地所の代金をごまかしたのか、②なぜその心をサタンに奪われたのかの2つである。そのことが分離されて問われているのではなく、一つのこととして問われている。**サタンに心を奪われて** 直訳は「サタンがおまえの心を満たし」となる。**サタン** とは、新約聖書においては、別名「試みる者」(マタイ4・3)、「訴える者」(黙示12・10)とも呼ばれているように、人間の外側から人間の「心」(人格の中心)に働きかけ、そしてついにはこれを「支配する」実在的な力(シラッター)。ルカは、このアナニアとサッピラのほかに、イスカリオテのユダにもこのサタンがはいったとしている(ルカ22・3)。**聖霊を欺き** 彼らの罪の最大の源は、この「聖霊を欺いた」ことにあった。サッピラにも同様の趣旨の叱責をしている(5・9「主の御霊を試みた」)。原始教会において、聖霊を欺き、試みる罪はもつとも重大であり、この世でも、また来るべき世においても赦されることではないとき

れていた(マタイ12・31〜32)。

4 4・36〜37のバルナバの行為同様、アナニアとサッピラは兩人とも自ら進んで地所を売り、その代金をささげた。しかし、それは彼らの自由な自発的行為であり、問題は教会の交わり(助け合い)と個人の自由意志の両者の間にある態度の問題であろうと考えるべきである。

どうして、このようなことを企んだのか 直訳は「なぜこんなたくらみがあるのかの心の中に置かれたのか」となる。アナニアは人間に対する悪巧みであったつもりであろうが、それらは結局のところ、聖霊なる神に対する悪巧みなのである。それは、代金をささげる行為と決断とは聖霊によってなされたものだからである。

5〜6 アナニアの死は、単なるショック死ではなく、またペテロの処罰でもなく、ペテロ(使徒)を通して語られた聖霊なる神による裁きである。それは、たとえばある写本では「倒れて」の前に「たちまち」を挿入していることから理解できる。人間の心のうちをすべて見通すことのできる聖霊なる神のご臨在のもとに生きるということは、これほどまでに緊張感にあふれたものであるということ、私たちは忘れてはならない。それゆえ

このことを伝え聞いた人々も、その圧倒的な臨在に非常なおそれを感じるのである。**息が絶えた** 神の裁きによる死であることを強調する。なお、聖書の中で、この言葉によって死を迎えた人物は、アナニアとサッピラのほかにシセラ(士師4・21)とヘロデ(12・23)だけである。

7〜8 三時間ほどたって 集会が長時間であることを示しているが、この三時間の間に教会ではどのようなことがなされていたのかを思いめぐらすこともまた意味がある。**彼女に言った** この言葉の取り方によって、2つの理解がなされる。まず、この言葉を翻訳の通りに理解すると、ペテロはサッピラに対して悔い改めの機会を提示していると考えることができる。しかし、「言った」を直訳すると「答えた」であり、この箇所においては問いのない答えとなる。するとここではサッピラに対して真実を告白する最後のチャンスを与える意図は無いと考える立場もある。

11 教会 使徒行伝の中で、この言葉が用いられるのことが最初である。

参考図書 10月2日分と同じ。

聖書

使徒7・54〜60

タイトル

天を見上げて

暗唱聖句

見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。

使徒7・56

目標

天を見上げ、キリストを証しする生涯を送る。

導入

じんきんきょう

(後藤 真)

「殉教」ということばを聞いたことがありますか。難しいことばですね。殉教というのは、イエス様を信じる信仰のためにいのちを失うことです。日本の法律ではどんな神様を信じてもよいということになっていますので、殉教ということは、関係ないように思うかもしれませんが。でも世界を見れば、今でもイエス様を信じているために殺されたり、礼拝をやめさせられたりする人たちがたくさんいます。わたしたちは、いのちの危険があってもイエス様を信じ続けることができるでしょうか？

ステパノ

今日読んだ聖書は、人々がステパノに石を投げつけて

殺してしまおうという恐ろしい場面でした。石を投げつけるというのは、とても重い罪をおかした人を死刑にするやり方でした。特に、神様をおとしめたり、他の神様を拝んだりした人に対する罰でした。でもステパノは石を投げつけられるような悪いことはしていませんでした。

ステパノは、使徒たちがお祈りとみことばのご用に集中できるよう、教会のいろいろな仕事をするために選ばれた七人のうちのひとりでした。今の教会なら、役員さんに当たるような人です。ステパノは、教会の仕事をしながら、イエス様を伝え、奇跡も行いました。そしてますますイエス様を信じる人が増えていったのです。

ステパノの証

ところが、それをねたんだ人たちがいました。旧約聖書の教えや自分たちの言い伝えを大切にしている人たちです。このような人たちはステパノを捕まえて議会に連れていき、嘘の証言をさせて、ステパノが神様をけがすような間違ったことを言っているのだと訴えたのです。

相手が喜ぶようないい方をして助かることもできませんでした。心の中ではイエス様を信じているのだから、いのちを守るために少しぐらい嘘を言っても

ゆるされると思う人もあるかもしれません。でもステパノは、聖書の教えを守らず、イエス様を十字架につけた人々の罪をはつきりと伝えます。

天を見上げて

これを聞いた人々は、激しく怒りました。自分たちがステパノをさばこうとしているのに、ステパノの方が自分たちをさばいたのです。悔しさと怒りでぎりぎり歯ごしらしました。でもステパノは、自分を憎んで今にも襲いかかるうとしている人たちを見るのではなく、天を見上げました。神様の右にイエス様が立っているのが見える。「神様の右に人の子（イエス様）が立っているのが見える」というステパノのことは聞いた人々はついに、「そんな話聞くものか」と耳をふさぎ、ステパノのところに押しよせます。そして、町の外に連れ出し、がけから突き落として大きな石を投げつけたのです。ステパノは殉教しました。

こんな乱暴をされて、どんなに怖かったでしょう。それでも、ステパノはいのちをかけてイエス様に従うことを選びました。たとえ殺されてもイエス様がいのちを与えてくださることを信じたのです。そして、「主よ、どう

ぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい」と叫びました。「父よ、彼らをおゆるし下さい」と言った十字架のイエス様を思い出します。

こんなひどい目にあうくらいなら、イエス様なんか信じたくないと思う人もいるかもしれません。でも、そう思わなかった人がいました。サウロという人です。サウロはこのときは、イエス様を信じる教会の人たちをいじめる側にいました。それが正しいと思っていました。でも、このサウロは後にパウロという名前に変えられます。そして異邦人にイエス様を伝える人になります。

イエス様を信じて生きること、死ぬまでではなくても、いじめられたり、つらい思いをしたりすることは必ずあります。教会ではイエス様を信じ、家や学校ではこの世の考えに合わせてごまかすこともできます。でも、それは十字架にかかってだれよりもつらい思いをしてわたしたちを救ってくださったイエス様を悲しませることです。天を見上げましょう。ドキドキすることも、怖いなあとすることもあるけれど、イエス様の素晴らしさを証ししてゆきましょう。

♪輝かせよ♪（PW41、イン87）

聖書 使徒7・54〜60 テーマ ステパノの殉教

序論

(石田高保)

ステパノはいエスこそキリストであると公言したために捕まり、最高裁判所で追及されることになりました。彼は聖書の専門家を向こうに回し、アブラハムからキリストまで二千年間の神のドラマをとうとうと語りました。不思議なのは被告人弁論がほとんどさえぎられなかったことです。それはステパノに力強く臨んだ聖霊のお働きで、その正論に対して反対者がぐうの音も出なくなっていたからです。最後には裁判官と被告人の立場が逆転し、居並ぶ陪審員たちがステパノの言葉によって逆に裁かれているのは皮肉です。

そこで追い詰められた彼らは、激しく怒って歯ざしりをし、大声で叫びながらステパノを石で撃ち殺そうとしました。その時ステパノのしたことは十字架上のイエス様のように、自分を殺そうとする人々のためにとりなし祈ったことです(60)。なぜ彼はこのような奇跡的、英雄的なことができたのでしょうか。

一、とりなすというライフスタイル

「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かかっていないのです」(ルカ23・34)、無実にもかかわらず死刑に処せられたイエス様の口から出た最初の言葉です。主は山上の説教で「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と言われましたが(マタイ5・44)、それを文字どおり実践しておられます。十字架につけられた当初、ふたりの犯罪人は一緒にあってイエス様をのしっていました。この祈りの言葉に犯罪人のひとりには心揺さぶられ、イエス様に悪口を言うことをやめました。自分をのしり、苦しめ、死に追いやる相手を心から赦し、神にとりなすなどというのは人間のできることでなく、神わざであると悟ったのです。ですからこれは「神に対する神の祈り」とも言われます。

実は私たちのひとりびとりのために、時空を超えて主は十字架の上で祈ってくださいました。私たちが神を無視して自分の思うままを歩んで罪を重ねていた時、主はこのように祈っておられました。主は現在も、私たちのために執り成しの祈りをしておられます。救われるため

に、イエス様のように変えられるように、私たちをとおして救われる人が導かれるように。さてあなたは60節の祈りを、誰に対してするでしょうか。

二、赦すというライフスタイル

〈主よ、この罪を彼らに負わせないでください〉、ステパノが死に追いやられながらも、イエス様と同じとりなしの祈りができたのは、日常的に自分から赦す生き方をしていたからではないでしょうか。キリストの十字架は、ご自分は何も悪くないのに、神に謝れない私たちに代わって謝っている姿です。相手が謝ってこなくても、赦してしまふ営みへと私たちはチャレンジされています。

「十分に霊的でありさえすれば、痛みや罪に悩まされることはない」「クリスチャンは痛みや罪とは無関係のはずだ」という考えは、聖書的に正しいこととは言えません。なぜなら私たちは生まれながらにして罪の性質を受け継いでおり、救われたからといって、罪の根が抜かれてしまうわけではないからです。イエス様が心の内にいてくださいますから、大それた罪を犯すことはないですが、罪を犯すことから解放されたと考えるのは行き過ぎです。心のたががゆるんだ時、ストレスがたまった時、

疲れや空腹を覚える時、うつかり罪を犯してしまうということがあります。そういう時、いたずらに自分を責めるのではなく、自分の罪と向き合い、神の光の下に差し出せばよいのです。自分は霊的なだから罪を犯すはずはないと思ひ込むことは、むしろ罪を犯しやすくします。自己義認はかえって罪を誘発するのです。

また自分に対して罪が犯されたとき感じる痛みは罪ではありません。人から裏切られた時に怒りを覚えたり、嘘をつかれて傷ついたり、親しい人が亡くなって悲しくなるのは正常な反応です。クリスチャンだから平気で行われるはずだというのは、人間性を無視した幻想です。否定的な感情を覚えた時は、それを神の前に告白し、自分に罪を犯した人を赦さなければなりません。人を赦すまでは過去に縛られ続けますが、赦すことによって過去から自由になることができます。

結論

自分の内面の現実を自分のものとして認め、十字架の許に持つて行きましょう。主は私たちを回復して下さいます。また信仰の友とそれを分かち合いましょう。そうしてこそ、赦しと癒しは本物になるというものです。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

54 これ ステパノの明快な弁明と、イスラエルの人々に対する非難。はらわたが煮え返る思いで 「のこざりて引かれる」という意味の言葉。非常に強い憤りと敵意を感じさせる言葉である。

56 この節のステパノの言葉をきっかけにして、それまではらわたが煮えくりかえりながらも我慢していたユダヤ人たちは、いっせいにステパノに殺到し、彼を石打ちの刑にしたのである。つまり、この節のステパノの言葉はそれほどの意味をもった言葉なのである。では、この言葉の何がそれほど重要なのであろうか。実は、イエスは十字架に当たって同じ聴衆に「今から後、人の子は力ある神の右の座に着きます。」(ルカ22・69)と語っている。この言葉によって、サンヘドリンの議員たちが十字架にかけたイエスこそが「正しい方」であった証拠ともなったのである。同時にこの幻は、ステパノ自身にとっても決定的に重要な意味を持つ。この幻では、人の子イエスは神の右の座に「立っていた」。それは、神の右の座

に「座って」おられたイエスが、今や愛するしもべステパノの霊を迎えるために立ち上がった姿を見たからであろう。あるいは神の法廷の場において、イエスが立って弁明をしておられる姿を見たのかもしれない。人の子ダニエル7・13「人の子のような方」から取られたメシヤの称号。実は、イエス以外の者が、イエスに対するこの称号を用いたのはここだけである。

57 人々 サンヘドリンの議員であったのか、それとも一般の群衆であったのかは不明。

58 彼を町の外に追い出して、石を投げつけた 石打ちの刑には、一定の手続きが必要であった。この刑は、冒瀆罪や偶像崇拜罪などの極悪人に対する罰であった。刑を宣告された者は、まず「町の外」(居住地の外の刑場)へと連れて行かれ、高い崖の頂から突き落とされる。そこで死ななければ、今度は石打ちによって殺すといわれている。証人たちは、自分たちの上着をサウロという青年の足もとに置いた ステパノが死刑に処せられるためには、2人以上の証人の証言が必要であった。彼らに課せられた仕事の一つは、囚人めがけて大きな石(ひとりで抱えることのできないほど大きな石)を落とすことで

あった。この際、証人たちの上着は邪魔になるので、彼らは上着を脱いだのである。**サウロという青年** ここで、本書の後半の中心人物として登場する「パウロ」が、回心前の「サウロ」という名で登場する。彼は刑の執行人の服を預かった人物として登場する。ここでサウロはステパノの刑の執行に立ち会っていただけでなく自ら賛成していた(8・1)。しかし、ここでの出来事が、後に記すようにサウロの生涯を変える出来事になるとは、誰も想像していなかったであろう。

59 主イエスよ、私の霊をお受けください ステパノの2つの祈りのうちのひとつ。イエスは、十字架にかかりながら、これと同様の祈りをささげられた(ルカ23・46)。しかし、このステパノの祈りは主イエスに対する呼びかけという点で、イエスの祈りとは異なる。それは、イエスこそが私たちの死後の一切を支配される神であるという信仰の告白であろう。

60 自らは石打の刑に処されながらも主の前に祈った祈りのもう一つ。この祈りも、主の十字架上での祈り(ルカ23・34)が背景にあるのであろう。このステパノの祈りもいくつかの点で先ほどのイエスの十字架上での祈り

とは異なる。まず、祈りの対象が主イエスであるということ、そして罪を赦^{ゆる}していたく理由を述べていないということである。それは、イエスこそ人の心の奥底まで知っておられ、その上で裁かれる審判者であることの告白であろう。**眠りについた** 59〜60節を読んでいると、ステパノは、およそ「眠りにつく」という形容とは思えない、壮絶な最期を迎えたのではないかと推測しがちである。しかし、その最期は「眠り」と表現できるほどの平安があった。それは、彼が心底から自らを主のみ手に与えきつたことの結果であり、主イエス・キリストの福音の確かさを確信し、心底から死の備えをすませていたからに他ならない。

最後に、パウロの登場の意義を再度確認する。アウグスティヌスは「もしステパノが祈らなかつたら、サウロは回心させられなかつたであらう。」と語ったそうである。サウロの登場は9章を待つてのことになるが、ステパノの祈りは決してむなしく地に落ちることはなかったのである。

参考図書 榊原康夫「聖書講解 使徒の働き 上巻」(いのちのことば社) 他

聖書

使徒9・1〜19

タイトル

サウロの回心

暗唱聖句

突然、天からの光が彼の周りを照らした。

使徒9・3

目 標

天からの光に照らされ、キリストによる
新生の恵みに生きる。

危険人物サウロ

(櫻井めぐみ)

サウロは、クリスチャンをいじめることで有名な人でした。それが神様から選ばれて、今度はイエス様を宣べ伝える人になってしまいました。よく神様はこんな人を選んだものだと思います。人間の判断では、サウロはむしろ絶対を選んではいけない超危険人物です。どうしてもそういう人を宣教者を選ぶという発想が神様にあったのか、本当に理解しがたいことです。しかし、サウロは復活のイエス様と直接出会い、それでもう完全に変えられちゃったんです。

天からの光に照らされて

サウロはこの時のことを後から、こう振り返っています。「私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。

私はいかにそれを人間から受けたのではなく、また教えられたのでもありません。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです」(ガラテヤ1・11〜12)。サウロは神によって選ばれていました。このサウロを選んだことこそ実に神の恵みなのです。選ばれてはいけない人、選ばれるはずのない人をも選ぶ。神の恵みとはそういうものであるということが示されるためです。恵みとは、それを受けるに値しないのに与えられるものを意味しています。本当はさばかれなければならない罪人なのに、イエス様が代わりに十字架にかかって死なれたので罰を受けなくてもよくなり、自分がかえって豊かな祝福を受ける。これが恵みです。クリスチャンにひどいことをしていたサウロであっても、イエス様に出会い、新しく変えられて、今度は逆に福音を伝える者になるならば、その他のどんなにひどい人間であっても、また救われる見込みのまったくないように見える人であっても、その人は神によって変えられるということがわかります。実際、サウロはまだ罪の中にあり、教会を迫害し続けている真つ最中だったのに、イエス様の方から彼に近づき現れてくださいました。その時のサウロには、イエス様を

信じようという思いすらありませんでした。正に、人間によるものではありませんと告白しているように、ただイエス様の光に照らされて、サウロは回心したのです。回心とは、心が回るといふ漢字を書きます。完全にひっくり返ってしまいました。こういうことは、人間にできることではありません。人が変わることがどんなに難しいか、私たちはよく知っています。それは他人を変えることもそうだし、自分だってそうです。自分は変わりたい、と思っても、自分にはそれができないのです。サウロは、自分の力で変わったのではありませんでした。また、人からの助言や影響を受けて変わったのでもありません。ただイエス様の光に照らされて、恵みによって変わりました。

選ばれる器

イエス様はサウロについてこう言いました。「あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選ばれる器です。」「わたしの名を運ぶ」とは、イエス様を宣べ伝え、あかしするという意味です。サウロは、イエス様の名を持ち運ぶ器として選ばれた人なのです。そして実は、イエス様を信じるみんなも選ば

れた器なのです。神様はつきりとしたご意思をもってみんなを選ばれました。でもなぜ選ばれたかといって、それは神様の気まぐれで選んだわけではありません。そしてまた、この人とこの人には天国行きの切符をあげようとか、そういう選びでもありません。神様はみんなをただ天国に行かせるためではなく、イエス様のことを伝えてもらうために選びました。そしてみんなが選ばれたのは、何かすばらしい能力があるというからではありません。神様が私たちを用いられるのは、人の目から見ても必ずしもポジティブな部分とは限らないのです。何かの痛みがあったり、とてもつらい経験をしてきたことだったり、病があったりすることは、自分にとって嬉しいことではないかもしれないけれど、実はそれこそが用いられる部分になるのです。そしてサウロのように、一人一人の人生が神様によって用いられるのです。みんなの人生そのものが宣教となります。なぜ自分は選ばれたのか。自分の単なる思い込みをはるかに越えて、神様がどんなに深いご計画をもってみんなを選ばれたのか、必ず、感動をもって知ることになるでしょう。

♪主がわたしの手を♪（新聖歌474、ホ89、PW97）

聖書 使徒9・1-19 テーマ サウロの回心

序論

(小泉 創)

人が変わるのには容易ではありません。しかし神は人を新しくすることができ、その生きた実例がサウロ（パウロ）です。

一、突然の出会い

サウロは信仰に熱心なユダヤ人で、主キリストの弟子たちを迫害してまわっていました。十字架にかけられた犯罪人、神に呪われたイエスがよみがえったなど馬鹿げているし、神への冒瀆である、ありもしないことを信じている人々の目を覚まさせようと思っていたのです。

息せき切ってダマスコの近くまで来たとき、サウロに大きな転機がおとずれました。突然の光に照らされて倒れると、自分を呼ぶ声を聞きました。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。わたしはあなたが迫害しているイエスである」と。

サウロは足元が揺るがされる思いだったことでしょ

二、迫害する者のための祈り

う。自分を照らした光、イエスだという声、見えなくなつた目。自分の身におきたこのことは一体どういうことなのか。イエスとは一体誰なのか。イエスの弟子たちは妄想にとりつかれていたわけではなかったのか。自分は何をしてきたのか。自分は正しい、と思ってきたが、本当は何もわかっていなかったのか。サウロはその声に従ってダマスコの町に入り、うなだれて三日を過ごしました。

その町、ダマスコにいたキリストの弟子の一人、アナニアもイエスと呼ばれました。「まっすぐ」という通りにいるサウロを訪ねて祈るようと命じられたのです。サウロによってどれだけ多くの兄弟姉妹がひどいめにあってきたかをアナニアは知っていました。ですからこれは容易に受け入れられない言葉だったのです。迫害者サウロの目がみえなくなつたのに、なぜ彼のために祈らなければならぬのでしょうか。しかしイエスは、サウロを異邦人、王たち、イスラエルの子たちに宣教するために選んだとおっしゃいました。迫害者を宣教者にする、そのようなことを誰が思いつくでしょうか。到底赦すこと

のできない人に手を触れたいとも、その人のために祈りたいとも思えないでしょう。しかし、アナニアが主に従おうとしたとき、その力をアナニアに与えてくださり、彼はそうしました。サウロのいる家にいき、サウロを兄弟と呼び、手を置いて祈ったのです。そして神の栄光があらわされました。

映画「炎のランナー」の主人公エリック・リデルは神を愛する金メダリストでしたが、後に中国宣教師になりました。第二次世界大戦下で日本軍の収容所に入れられながらも、人々と一緒にスポーツをし、聖書を教えました。あるとき、マタイ五章「あなたの敵を愛せ」が開かれたとき、イギリス人の少年が敵の兵隊のために祈るなんて不可能だ、と言いました。リデルは敵のために祈り始めるなら、あなたは神中心の人になる、と教えました。少年はしぶしぶ祈り始めました。すると日本兵への憎しみは消え、彼らへの神の愛に気付きました。神は少年の心を造りかえられたのです。リデルは間もなく収容所で亡くなりましたが、この少年は戦後、宣教師として日本に渡り、40年に渡り福音を伝えたのです。

三、やみから光へ

アナニアに祈られ、サウロの目から鱗のようなものが落ちました。サウロは霊的な目もひらかれて、イエスが誰であるか、自分がどれほど罪のやみで、目がふさがれたものであったかがわかりました。イエスはよみがえられて今も生きておられるお方。イエスの弟子たちは、神が送られた救い主を信じている者たち。敵である自分のためにも手を置いて祈ってくれた、これはあり得ないことです。サウロは変えられ、イエスを主と告白して、バプテスマを受けました。一切の罪を赦されたサウロは新しい人生を始めました。アナニアと一緒に、諸会堂で「この方こそ神の子です」と宣べ伝え始めました。迫害者であったサウロその人が、迫害に來た町でイエスは神の子であると宣べ伝えたのです。

結論

迫害者を宣教者に造りかえられたのは神でした。神には人を造り替える力があります。子ども達ひとりひとりもキリストと出会い、神の大きな御力にあずかることができますように。ここにいる私たち一人一人のように。

研究資料

(小平徳行)

サウロ（パウロ）の回心と召命のいきさつは、使徒の働きに3回記されている（9、22、26章）。これは彼の生涯を根底から覆す一大転機となった。この出来事は初代教会の福音宣教史に欠くことのできない重要性を有している。

テキスト

1～2 なおも サウロによる迫害の様子については8・1、3に記されているが、その後サマリア伝道の記事で中断されていた。しかし彼による迫害は、その間も続けられていた。**主の弟子たちを脅かして殺害しようと息巻き** どれほどキリスト者に対して激しい怒りに燃えていたかが分かる。やがてサウロはイスラエルの領内にとどまらず、国外に逃れたキリスト者を追跡しようとした（26・11）。**ダマスコの諸会堂あての手紙** ダマスコはエルサレムから北北西に約240km離れたところに位置する。当時シリアの中心都市で、ローマの管理下にあり、ユダヤ人の住民が多かった。この手紙は、サウロ

がダマスコに逃げ延びたキリスト者を逮捕する権限を得るためのもの。大祭司はユダヤ議会の議長としてユダヤ人に対する権能をローマ政府の承認のもとに持っていたが、国外においてもユダヤ人およびその社会に対して強い権力を認められていたのである。**この道の者** キリスト者に対する本書特有の呼び方（19・9、23、22・4、24・14、22）。それは初代教会が、主イエスに対する信仰を「いのちの道」「救いの道」と考えていたことを示している。

3 天からの光が 時刻は真昼ごろであった（22・6、26・13）。この光は太陽よりも明るく輝き、主の栄光を示すものであった。この光はサウロの外側を照らしただけでなく、彼の内側を照らし、回心へと至らせ、迫害者を宣教者へと転向させることになった。

4～5 わたしは、あなたが迫害しているイエスである 呼びかける声の主は復活されたイエスであった。キリスト者への迫害行為はとりもなおさずイエス・キリストに対する迫害行為であった。このことはキリストと教会が一体であることを示している（ルカ10・16）。教会が苦しむ時、イエスご自身も苦しんでいるのである。

6 立ち上がって、町に入りなさい これはサウロに對する配慮に満ちた命令であつた。この時、サウロは急変した事態に十分に対処する能力を失つていたため、当座なすべきことだけを命じたのである。**あなたがしなければならぬこと** キリスト者とは、自分のしたいことではなく、キリストが望んでいることをする人である。

8 目を開けていたものの、何も見えなかった 神は人間に對し、しばしば、悪しき企てを止めたり、注意を引いたりするために一時的に、目を見えなくすることがある（創世記19・11、Ⅱ列王6・18〜20）。この時は、サウロに迫害をやめさせるためでもあつたが、迫害者への処罰というよりも、サウロの回心と召命に深い内省を与えるための恵みの手段であつたといえる。

9 三日間 断食は祈りの時であつた（11）。この期間、サウロにとって、これまでキリスト者を迫害して、取り返しのつかない罪を犯してきたことについての悔い改めと、十字架につけられて死んだはずのイエスが復活したことについて深く考える機会となつた。

10 アナニア 彼は「律法に従う敬虔な人で、そこに住んでいるすべてのユダヤ人たちに評判の良い」人であつ

た（22・12）。この件以外では聖書に登場しないが、重要な使命を忠実に果たしたのである。

11 『まっすぐ』と呼ばれる通り この街路は今日もダマスコ東西に貫通する通りの一つとして現存している。

15〜16 わたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です 主はサウロを宣教の器として聖別された。

17 兄弟サウロ サウロが迫害者であることを聞いていたアナニアであつたが、主の命令を受けて、兄弟としてサウロを歓迎した。キリスト者の愛と赦し（ゆる）を示す模範である。

18 サウロの目から鱗うろこのような物が落ちて、目が見えるようになった この時、ただ肉眼が見えるようになっただけでなく、霊の目も開かれたのである。その証拠に、彼はキリストの名によってバプテスマを受けたのである。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』、斎藤篤美「使徒の働き」『新聖書注解・新約2』（以上のちのことば社）、I. Howard Marshall, Acts (The Tyndale New Testament Commentaries) など

聖書

使徒16・6～10

タイトル

マケドニアからの叫び

暗唱聖句

マケドニアに渡って来て、私たちを助け

てください。

使徒16・9

目標

救いを求めている人々を覚え、宣教への招きに応答する。

導入

(今田雅子)

先週は、大迫害者だったパウロがイエス様の光に照らされ、イエス様こそ本当の神様・救い主だと言う事が分かったというお話でしたね。本当にイエス様は私たち人を新しく造り変える事が出来るお方！ イエス様って本当に凄いですよ！

そしてパウロは「イエス様ってこんなお方、私を変えてくださった」とイエス様のことを皆に伝える人（伝道者）になったのです。

今日、登場するパウロは先週のパウロと同じ人物でユダヤの言葉での呼び方から、ギリシャ語の呼び方に変ったのです。ユダヤの国から出て、色々な国に行ってイエス様のことを伝えるので「パウロ」と言う呼び方が

良かったのでしょね。

そっじゃない！

パウロたちはイエス様のことを伝える一回目の伝道の旅で生み出されたアジアの教会を力づけるために、二回目の伝道の旅をしていました。「あれ、おかしい。アジアの人たちにイエス様のこと、イエス様による救いを伝えたいのに！ なっ、なんで？」聖霊なる神様が「そっじゃない！ そっちに行ってはダメ」と言ってるようにストップをかけられるのです。「よし、じゃあこっただ」と進んでいくと、また聖霊様が「そっじゃない！」とストップをかけられるのです。私だったら「えー、どういうこと？ どこに行ったらいいの！ 神様、なに考えてるの」って思ったでしょう。パウロも不思議に思っただけかもしれませんね。とうとうパウロたちは、初めて考えて行く所としていた所とは反対方向に来てしまいました。そこはトロアス。目の前はエーゲ海、海です。パウロたちは祈って祈って、進むところを聖霊様に尋ねながら進んでいたの、また祈ったでしょう。

マケドニア人の幻

その夜のこと、パウロは一つの幻を見ました。海の向

こうにいるマケドニア人が、「何とかマケドニアに来て！わたしたちを助けて！」と叫ぶように必死で心の底から頼むのです。何度も何度も訴えるその幻は、パウロの心に強く迫りました。「そうか、そうだったのか」パウロは、やっと分かったのです。なぜ聖霊様が行く道にストップをかけられ、ここに導かれたのが。「マケドニア…海を渡って行く所。そこにイエス様による救いを求めている人たちがいる。」そしてパウロは皆に言いました。「私は海の向こうの人たちが『私たちを助けて！』と叫んでいる幻を見た。これは、聖霊様が私たちを彼らのところに招いているのだ。さあ行こう！マケドニアに出発だ！」

神様は私たちを用いられる

聖霊様はイエス様の名前さえ一回も聞いた事のない人たちに、イエス様のことを教えてあげるために、パウロたちを用いられたのです。それは「全ての人がイエス様を信じて救われて欲しい」と神様が願っておられるからなのです。

「へエ！パウロって凄いなあ。色んな国に行つてイエス様のことを教えたんだー。でも、私はパウロじゃないしイエス様のことを教えるなんて無理。」そうでしょう

か？ 皆さんはイエス様についてどんなことを知ってますか？「イエス様という名前」「イエス様は神の子」「イエス様は十字架で死なれたけど、三日目によみがえられた」「イエス様を信じたら罪が全部ゆるされて、永遠のいのちを貰える」「イエス様は見えないけど、いつも一緒にいてくれて、凄く愛してくれる」「お祈りに応えて、助けしてくれる」「死んでも天国に連れて行ってくれる」

ホラ、一杯知っているよね。「でも、誰に教えるの？恥ずかしいし、そんなこと言ったら嫌な顔されたりするかも」って思うかも知れませんか。だから祈りましょう。「誰にイエス様のことを教えるの」って、すると聖霊様は「あの子だよ」って教えてくださいます。

教会学校の先生たちが、子ども集会の案内を小学校の校門の前で配っていた時、教会学校に来ていたお友だちが、その案内を学校の先生や友だちに「今度、教会に来てね！」と言って、その案内を渡したのです。そのお友だちも、ほんの少しイエス様のことを伝える働きをしたのですね。

♪主は僕らを用いてくださる♪(PW59)

聖書 使徒16・6～10 テーマ マケドニアからの叫び

序論

(宮澤清志)

パウロの第二回伝道旅行は、行こうと思った方向が二度までも聖霊によってとどめられ、前には海しかないトロアスに導かれました。そこで見た幻によって、海を渡り、期せずしてヨーロッパ宣教の第一歩が記されることになりました。

一、行き場がなくなる時

第二回伝道旅行の目的は、第一回伝道旅行で生み出された小アジア地方の諸教会を訪問し、力づけるためでした。デルベ、リステラと訪問しましたが、(アジアでみことばを語ることが聖霊によって禁じられたので)、西へ進み、北上しながら小アジア巡回に戻ろうとすると、(イエスの御霊がそれを許さなかった)ので、とうとう小アジアの西端、目の前はエーゲ海というトロアスに着いてしまいました(聖書地図参照)。

文字にすれば数行ですが、この間に一～二週間、ある

いはそれ以上の時が経っていたと考えられます。「聖霊に禁じられた」とはパウロが病気にかかっていたのではないかとの説もありますから、不安や恐れがあったかもしれません。しかし、忍耐して主の導きを祈り待ち望むときが、次の大きなステップのために必要だったのです。

二、マケドニア人の叫び

トロアスでパウロは、ひとりのマケドニア人が(マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください)と懇願する幻を見ました。

パウロがこれまで想定していた伝道の対象ではない、海の向こう側の地域からの招きでした。しかしパウロは、神の招きと確信して、ただちにマケドニアに渡っていく決心をします。

そこには、「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊たちがいます。それらも、わたしは導かなければなりません。」(ヨハネ10・16)、「あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」(使徒1・8)など、主イエスのみ言葉の裏付けがありました。

また、救われるべきはすべての人ですが、(ひとりのマ

ケドニア人〉の救いを求める声に、パウロは応えていこうとします。マケドニア伝道において、ピリピではリディアという婦人を導いてその家族も救われ、占いの霊につかれた女奴隷に解放を与え、牢獄に入れられますが、看守に「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」(使徒16・31)と福音を説きました。

主イエスも、その伝道は一人の悩みを聞き、苦しみに寄り添うものでした。「いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか」(ルカ15・4)と問いかけられたように、苦労や困難が伴うとしても、救いを求める声に応えることが主の御旨の内を歩むことであり、また主の御顔を仰ぎ続けることのできる道、主が共にいて力づけてくださっていることを実感できる生涯なのです。

三、確信に立つ生涯

マケドニアに渡り、ギリシャ宣教を始めてからのパウロの働きについて、聖霊の導きを受けていたことが使徒の働きに何度か記されています。第三回伝道旅行の最後には、エルサレムに帰ったら捕らえられることも聖霊に示され、預言者アガボを通して人々からエルサレムに戻

らないよう涙ながらの勧告を受けますが、パウロの心は揺るがずに、主の導きだけに従っていきました。

私たちも、自分であれをしよう、ここに行こうとしているときは、楽しいかもしれませんが、思いがけないことで行き詰ると不安でいっぱいになります。

それよりも、主は私をどこに導こうとされているか祈り求めたり、また助けを求めている人、救いを必要としている人はいないか、耳を澄ましたり目を広く向けてみたらどうでしょうか。救いを求める声を聞くと、それは主が私たちを遣わすために届けられた招きの声であり、主から遣わされていく時には、少々の困難があっても、確信をもって全力を尽くすことができます。

結論

聖書は、イエス様に救われ、共に歩んでくださっている幸いを知る者は、その喜びを伝える使命が与えられていることを教えています。

私たちの周りにいる、救いを求めている人々の声を聞き取り、イエス・キリストに救いがあることをお伝えする者となりましょう。

研究資料

(小平徳行)

宣教は神ご自身が導いて進めておられる。ここは福音が小アジアからヨーロッパ大陸に伝播されるに至った経緯が記されている。この出来事は「人の心には多くの思いがある。しかし、主の計画こそが実現する。」(箴言19:21)という真理の実例であった。

テキスト

6 アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられた パウロ一行はガラテヤ州リステラを出発し、アジア州に行き、その中心であるエペソを伝道活動の舞台にしようと計画していたが、聖霊によって禁じられた。それは、心のうちに与えられた衝動であったのか、一行の誰かによる預言的な言葉によったのか、あるいは、何らかの事情で計画通りに行かなかったことを聖霊による禁止と受け止めたのかもしれないが、定かではない。この時には禁じられたアジア伝道であったが、後に神はアジアの地での伝道の道を開かれた(19・10)。**フリュギア・ガラテヤの地方** フリュギアはガラテヤ州とアジア州に

属している。この地名はフリュギアとガラテヤの二つの地方を意味しているのではなく、ガラテヤ州のフリュギア地方を指していると考えられる(ラムゼー)。

7 イエスの御霊がそれを許されなかった 禁じたのは6節では「聖霊」、ここでは「イエスの御霊」と表現の相違がある。具体的には何かは分からないが、先の場合とは異なり、イエス・キリストによる介入を意識させられる方法だったのかもしれない。いずれにせよ神がパウロ達を確実に導いておられることを示しており(10節)、この伝道旅行が人知を超えた確かな導きの中で進められていたことをルカは明らかにしようとしている。**ピティニア** 小アジア西北にある州で、文化水準の高いギリシャ風の都市とユダヤ人居留地があった。ペテロは後にピティニアに手紙を書き送っていることから(1ペテロ1・1)、神は後にこの地にも福音を宣べ伝えさせたことを知ることができる。

8 ミシアを通過して、トロアスに下った 聖霊によって禁じられた結果たどりついたのは、予定外の地であるエーゲ海沿岸の港町トロアスであった。実にリステラからここまでの道のりは約700 kmであった。

9 これまでの一連の神の禁止は、積極的な導きに変わる。幻 幻や夢は当時、神が人間と意志の疎通を図るための手段として認められていた。使徒の働きではしばしば幻によって宣教が展開していったことが記されている。幻によって、アナニアがサウロの回心、召命のために用いられ(9・10、19)、ペテロとコルネリウスを通して福音の扉がユダヤ人から異邦人へと開かれた(10・11章)。もし、これらの幻がなかったなら、キリスト教はユダヤ教の一派でとどまっていたかもしれない。このように幻は人間の固定観念を打ち碎き、神のみこころを悟らせるために用いられたのである。一人のマケドニア人これがルカであったと断定する資料はない(そもそもルカは異邦人であるが、ギリシヤ人であったという確証はない)。しかし彼はトロアスの地でパウロと出会い、福音宣教に新しいビジョンを与えたという想像はあり得ないことではない。

10 神が私たちを召しておられるのだ パウロは即座にこの幻を、マケドニアに福音を宣べ伝えるようにとの神からの招きであると解釈した。この時、ようやく二度も聖霊に禁じられた意味を理解できたに違いない。確信し

た(ギ)スンビバゾー) 元来「結び合わす」の意味である。9・22では「証明する」という意味で用いられている。この語はいろいろな証拠から一つの結論を引き出すことを表すのに使われる。未知の新しい大陸に出かけて行く事は冒険であったが、パウロにとっては、主から与えられた異邦人伝道という使命(9・15)と一致するものであった。私たち ここで突然、語り手が一人称複数形となる。本書ではこのような「私たち章節」がしばしば出てくる(16・10、17、20・5、15、21・1、8、27・1、28・16)。これは著者ルカが一行に加わり、彼が直接目撃した伝道旅行記をつづっている個所であることを示している。ルカは、この時から医者として、パウロの伝道を助けるようになった。ただちに 神の御旨が分かったなら、即座に従うべきことを教えられる。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』、斎藤篤美「使徒の働き」『新聖書注解・新約2』、B・F・バックストン『バックストン著作集第10巻・使徒行伝講義 下』(以上のちのちとば社)、I. Howard Marshall, Acts (The Tyndale New Testament Commentaries) 他

聖書

使徒16・25〜34

タイトル

主イエスを信じて救われよう！

暗唱聖句

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

使徒16・31

目標

主イエスを信じて救いにあずかり、家族の救いのために祈る。

導入

(飯田勝彦)

「信じる」の反対は何でしょう？「疑う」です。私たちは生活の中で多くのことを信じて歩んでいます。もつと言えば、何事も疑っていると生活できません。例えば「この店の物を食べたらお腹痛くなるかも知れないから、水だけにしよう」、「この新幹線、ちゃんと目的地に行くか分からないから歩いて行こう」と疑っているとどうなるでしょうか。

信じるとは、委ねることです。イエス様にすべてを委ねることは、この地上の生活だけでなく、死んだ後にも大きく影響してきます。

苦難の中にも賛美を与えてくださる主を信じる

先月、クリスチャンを迫害していたパウロ（サウル）が救われたことを見ました。パウロはイエス様を信じて180度変えられた人です。彼はイエス様の十字架と復活を伝え、多くの人々を救いに導く働きを任せられました。彼は、そのために命を賭けて様々な所に出かけて行きました。でも、それは決して簡単な道の前ではありませんでした。多くの困難が待ち受けていたのです。ある時は、同じ民族であるユダヤ人から石を投げられ死にそうになったこともありました。今日の聖書箇所の前では、占いの霊につかれた女の霊を追い出したこと書かれてあります。パウロたちはこの女にとって良いことをしましたが、この女の主人たちは、良く思いませんでした。それは、主人たちはこの女を利用して金儲けをしていたからです。主人たちは「パウロたちが町を混乱させている」と嘘を言って長官に訴えました。群衆も一緒になって彼らを責め立てました。これによってパウロたちは何度もむちで打たれて牢獄の一番奥に入れられてしまったのです。

これは、最悪の状況です。皆さんならどんなこと言うでしょうか。「俺たちは何も悪くない！ 神を信じているのに何でこうなるんだ！」と叫びますか？ パウロた

ちの姿が25節にあります。最悪の状況の中で彼らの口からは賛美が溢れました。「ほかの囚人たちはそれに聞き入っていた」(25)とありますから、パウロたちは誰にも聞こえないような小さな声で賛美したのではないはずで、す。「聞き入っていた」ですから、囚人たちの心にも届く賛美であったのでしょうか。牢獄の中で賛美！ 誰がパウロたちにこのような力を与えたのでしょうか。それは神様です。

主は、信じる者に困難の中でも賛美を与えてくださいます。さらに、その賛美を通して内側に困難を乗り越える力を与えてくださるのです。

喜びを与えてくださる主を信じる

主は不思議なことをされる方です。パウロたちが主を賛美していると、突然、大地震がおきました。そのことで牢獄の土台が揺れ動き、戸が全部開いてみんなの鎖が解けました。看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちがみな逃げ出したかと勘違いしました。彼は責任を感じて自ら命を絶とうとしたところ、パウロがそれを止めたのです。命拾いした看守はパウロとシラスの前に「先生方。救われるためには、何をしなければなりま

せんか」とひれ伏しました。牢獄に入れられている者に救いを求めるとは不思議な光景です。看守は、牢獄という困難の中で賛美するパウロらの姿や彼らの心の自由さに驚いていたに違いありません。パウロはひれ伏し叫ぶ彼らに迷うことなく「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」とはっきりと答えました。その後、看守もその家族も洗礼を受け、神様を信じる者となったことを、全家族と共に心から喜びました。

看守の家族にはこれまでとは違う、主がくださる喜びが家族に満ちたのです。

まとめ

人生には多くの悩みや苦しいことがあります。その中で神であるイエス・キリストを信じて救われると、困難の中でも神様は賛美を与えてくださいます。また、主にある喜びをも与えられます。主にある賛美と喜びは救いを受けた者の大きな恵みです。主イエスを信じるのに、何か妨げているものはありますか？ また、すでに救われている人は家族の救いを祈りましょう。

♪さあイエスさまを信じましょう♪ (ホ60、ふ1)

聖書 使徒16・25～34 テーマ 看守と家族の救い

序論

(福井文彦)

パウロは幻の中でマケドニア人の叫びを聞き、ピリピで伝道した。これはヨーロッパにおける最初の伝道で、その初穂が女商人リディアとその家族である。その後、占いの霊から解放した女奴隷の所有者に訴えられ、投獄の憂き目にあった。しかし、主なる神は二人を獄に繋がれたままにしておくことをなさらず、看守と家族を救い、彼を奇跡をとおして出獄させられる。この二家族がピリピ教会の基礎となったのである。

一、占いの霊につかれた女奴隷の癒し(16～18)

この女の主人たちは、彼女の占い(巫女、口寄せのような者)を利用して金儲けをしていた。パウロたちは、祈り場に行く途中で、この占いの霊につかれた女に出会った。それからというもの、この女は、パウロ一行の後をしつこく追いかけて、「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えていま

す」と叫び続け、それをやめなかったのである。

汚れた霊につかれた者が聖霊に満たされた者に触れた時、狂乱状態に陥り超越的な力の存在者を発見して叫び出す。これは福音書などによく出てくる実例である(マルコ1:23～24)。このことはパウロの伝道の妨げとなつた。そうした状態が毎日続くので、パウロは、「困り果てて、その霊に向かい、「イエス・キリストの名によつておまえに命じる。この女から出て行け」と言った。パウロの命令は復活の主の御名によるものであったので、その瞬間に霊がその女から出て行き、癒された。

二、牢獄のパウロ(19～26)

ところがこのことは、占いの霊につかれた女を利用して、利益を得ていた女の主人たちにとつては大問題であった。金儲けの手段を失ったからである。そこで彼らは、女が悪霊から解放されたことを怒り、パウロとシラスとを捕らえて、役人に引き渡すため、広場に引き出した。その理由は、パウロとシラスが町をかき乱し、やってはならない風習をはやらせたというものであった。こうして彼らは、むち打たれ、牢獄に入れられた。

無実の罪で牢獄に入れられたパウロたちであったが、

長官に逆らうことなくつぶやくこともなかった。その不当な仕打ちにも関わらず、足かせをはめられた不自由さの中で、生きて働かれる神に祈り、しかも賛美を歌い続けていたのである。

（すると突然、大きな地震が起こり、牢獄の土台が揺れ動き、たちまち扉が全部開いて、すべての囚人の鎖が外れてしまった）のである。神を信じる人の人生にはこのようなことが起こる。自分は何もできなくても、生きておられる神が、道を開いてくださる。あるいは生活の場面が展開して、当面の問題が解決していくのである。

三、看守とその家族の回心（27～34）

足かせをしつかりとかけられていたパウロであったが、大地震のために、鎖は解け、戸は開き、自由の身となった。この地震のため目を覚ました看守はこれを見て驚き、てっきり囚人たちが逃げ出してしまったと早合点し、責任を感じて自害しようとした。パウロは不当に牢獄に入れられていたにも関わらず、（自害してはいけない。私たちはみなここにいる）と叫んだ。すると看守は、牢獄に駆け込んできて、おののきながら、パウロとシラスの前にひれ伏し、（先生方。救われるためには、何をし

なければなりませんか）と言ったのである。「先生方」とは「主たちよ」（ギリシア語）である。看守にとってパウロたちは囚人ではなく、尊敬すべき「先生」となったのである。

「救い」への真剣な求めに対して、パウロたちの答えは、（主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます）であった。看守のつたパウロに対する信頼の態度は、やがて、イエスへの信頼に変わった。そして、看守と彼の全家族が救われたのである。

結論

主イエスを信じる時、その人は救われる。ただ、本人が救われるだけでなく、その救いは家族に及んでいくのである。もちろん、父が救われたからといって自動的に子が救われるという意味ではない。救われるにはおののが個人的に信仰を告白しなければならない。しかし、家族の一人が救われると、そのことが発端となり救われる人が出てくるのである。だから、先に救われた私たちは家族の救いのために真剣に祈ろうではないか。

研究資料

(宮澤清志)

テキストト

25～26 度重なるむち打ちと足かせ(23～24)は、ふたりを苦痛のどん底に追い込んだであろうが、それにもかかわらず、彼らは折りつつ、主に賛美を歌い続けていた。この時、パウロとシラスとは獄屋の最も奥の部屋にいた(24)。一方、ほかの囚人たちは彼らの賛美に聞き入っていた。この2人の姿は囚人たちを感動させたに違いない。そのようなとき、**突然、大きな地震が起こり** 多くの注解者は、この地震をパウロたちの祈りに対する神の応答と見る。

27 物語の焦点は、パウロからひとりの看守へと転換する。看守の務めは、囚人たちが逃亡しないように見張ることだった。彼は、ローマの軍人として、その義務に対する責任を当局から植え付けられていたことであろう。地震によって床から飛び起きた看守は、その責任感から真っ先に囚人の様子を見に行ったのであろう。ところが目にしたのは開け放たれた獄屋の扉であった。最悪の事態を直感し、直ちに責任をとろうとして自害を企てた。

というのは、ローマ法によると、囚人の脱獄を許した看守は、その囚人に課せられていたのと同じ刑に服することになっていたからである。

28 ところが、看守はパウロの声によってその行為を遮られることになる。ある注解者は、囚人全員がそこにいることを、灯りがない中でどのようにして知ることができたのか、あるいは看守は自害しようとしていることをどのようにして知ることができたのか、等様々な疑問を呈している。しかし、そのようなことは聖書の本筋からはずれたことであり、彼の部下が持っていたであろう明かり(29)のほのかな光によっておぼろげながら見ることができた可能性もあることも含めて考える必要がある。**私たちはみなここに**いる。このことばはこの看守を驚愕きょうがくさせた。獄屋の中には、パウロとシラスだけではなく、囚人たちが皆逃亡しないで残っていたのである。看守は、自分の経験では理解しがたい出来事が目の前で起こった事に驚き、次節以降へと展開する。

30 **救われるためには、何をしなければなりません**か 大きな地震という出来事と、2人の従前よりの評判、また囚人たちがひとり残らず逃げることはなかったという

事実とが結びつき、看守は2人を神の代理人、また魔術師とも思いこんだのであろう。看守の求める「救い」が何からの「救い」かは定かではないが、おそらくはこの出来事を通して彼らの伝える神を受け入れないわけにはいかないと思ったのであろう。看守の真剣な求めを感じる。

31 主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます パウロとシラスは、人がどうすれば救われるかについて、当時の初期キリスト教の信仰告白を反映させ「主イエスを信じる」ことによる、と答えたのであろう。すなわち、イエスを主として信頼し、この方を主と受け入れて自らをささげる必要があるということを語るのである。私たちが常に、そして繰り返し立ち返るべき事は、イエスこそ私の人生の主であるという信仰の告白である。この信仰に立つとき、人は救われる。しかも、このことは自らが救われる道であるばかりでなく、自らの家族も同様に救われる道であることを説く。聖書は家族の大切さ、一体性を強調し、家族全員が救われ、あるいは同じ神を信じることは、当然のことであるとされている(16・15、ヨシユア24・15等)。

32 救われるためには、イエスを主と信じると同時にそのお方を知ることもまた必要なことである。看守やその家族に対して2人はキリスト教の教えを語って聞かせた。**主のことば** 福音のことである。

33 クリユストモスという古代の名説教家は、「彼は洗ってやり、洗ってもらった。彼はふたりの打ち傷を洗ってやり、自分の罪を洗ってもらった」と語っている。看守はふたりを家へとつれてくる前に、おそらく獄内の中庭の井戸で、ふたりの傷ついた身体を洗い、同時にそこで彼の家族共々洗礼を受けたのではないだろうか。なお、家族の受洗は、使徒では他に10・44、16・15にも述べられている。

34 家 刑務所の房の上階にあったのかもしれない。**食事** 喜びの結果としての主の晩餐を意図しての食事であろうし、またキリスト者としての交わりの愛餐の意味をもつ食事であろう。またこの食事は主の聖餐を囲んだのかも知れない。**心から喜んだ** おどりがあって喜ぶ、の意味。

参考図書 I・ハワード・マーシャル「ティンデル聖書注解 使徒の働き」(いのちのことば社) 他

聖書

I列王3・16～28

タイトル

ソロモンの知恵

暗唱聖句

神の知恵が彼のうちにあつて、さばきをするのを見たからである。I列王3・28

目標

神様からの知恵によつて生きる者となる。

導入

(土屋開夫)

最近の小学生は勉強、大変みたいですね。英語やコンピュータも習ったり。今の世の中を生き抜くために、「スーパーこども」を育てようとしてるそうです。

そういう学校のお勉強がよく出来ることも大切かも知れませんが、でも、もっと大切な知恵があるんです。それは「神様から与えられる知恵」「神の知恵」です。それはどういう知恵かと言うと、神様の前に何が良いことか悪いことか、何が本当かウソか、今、何をするべきか、するべきでないかなどを判断することが出来る知恵です。

今日出てくるソロモン王は、ダビデ王の息子の一人で、ダビデ王の後をついでイスラエルの王になりました。

でも王様って大変です。国を正しく治めなければなりません。そこでソロモン王は、イスラエルの国民を正しく治められるように、神様に知恵を求めました。神様はその祈りに答えて、ソロモン王に素晴らしい知恵を与えてくださったのです。

二人のお母さん

ある時、二人の女性がソロモン王のもとにやってきました。この二人は今で言うルームシェアみたいに同じ家に住んでいました。そして同じ頃にそれぞれ赤ちゃんを産みました。ところが夜寝ている間に、一人のお母さんは抱いていた小さな赤ちゃんの上に乗ってしまいました。ところが赤ちゃんはかわいそうに死んでしまいました。と自分の赤ちゃんを死なせてしまったお母さんは、死んだ自分の赤ちゃんを、もう一人の生きている赤ちゃんをこっそり入れ替えたというのです！

この二人のお母さんが「生きているのが私の子です。死んだのはあなたの子です。」「いいえ、死んだのがあなたの子です。生きているのは私の子です」と言い張るのです。いったい、果たしてどっちの言うことが本当で、どっちがウソなのでしょう？

神様から与えられた、ビックリする知恵

この時、きつとソロモン王は心の中で祈ったことでしょう、「神様、知恵を与えてください。真実を教えてください」と。そしてソロモン王は剣をもつて来させ、「生きている子を二つに切り分け、半分をこちらに、もう半分をそちらに与えよ」と命じました。なるほど、赤ちゃんを半分ずつに分ければいいのか・・・えー?! そんなことをしたら赤ちゃんが死んでしまいます!

すると、その赤ちゃんの本当のお母さんは叫ぶように言いました、「生きている子をあの女にお与えください。決してその子を殺さないでください」と。ところがもう一人のお母さんは言いました、「それを私のものにも、あなたのものにもしないで、断ち切ってください」と。

この二人の言葉を聞いたら、どっちが本当のお母さんか、みんなにも分かりますよね。そう、「赤ちゃんを殺さないでっ」と叫んだ女性が本当のお母さんですね。ソロモン王は勿論、赤ちゃんを本当に殺すつもりはありませんでした。本当の心を知るためだったのです。

我が子を本当に愛する母親の愛の心と、悔しさと妬ましきからウソをついたり、人のものを奪おうとする罪の

心、それをちゃんと見分ける知恵を、ソロモン王は神様から与えられたのですね。このソロモン王の判決を聞いた人たちは驚きました。「神の知恵が彼のうちにあって、さばきをするのを見たからである」(28)。

まとめ

ソロモン王は旧約聖書の箴言の多くの部分を書きました。その1・7に「主」を恐れることは知識の初め。」とあります。私たちの父なる神様は、何でも知っておられ、何でも出来る「全知全能」の神様ですね。この神様を信じている、知っている、そしておそれ敬って礼拝している・・・そのことがもつとも大切な知識、知恵だということですよ。

みなさんも毎日生きていく中で色々なことにぶつかってしょう。「あー本当に困った。一体どうすればいいんだろう」。そんな時は慌てないで、恐れなくて、「神様、どうしたらいいでしょう。知恵を与えてください」と祈ってください。すると心が落ち着いてきて、やがて光が差すように神様からの知恵が与えられてきますよ。

♪主の教えを喜びとし♪

(ミクタムプレイズ&ワースhip 21)

聖書 I列王3・16〜28 テーマ ソロモン王の知恵

序論

(鎌野善三)

今週は、「王たち」の単元の1回目として、紀元前960年、若くしてダビデ王の継承者となったイスラエル王国3代目の王ソロモンに焦点をあててみよう。彼の知恵がどのようなものであったかを示す逸話が、今日の聖書箇所に記載されている。

一、公平にさばく知恵

こともあろうに、普通の人々ではなく、二人の遊女が王のもとにきたことに留意したい。長老や役人では解決できない難しい問題だったゆえに、王の最終判断が求められたのだろう。当時の社会にあつて、遊女は決して芳しい職業ではなかったにもかかわらず、しかも、このように最高権力者である王に直接訴えるシステムができていたことは驚きだ(これらの点では、江戸南町奉行だった大岡越前守の似たような裁判の話とかなりの違いがある)。そして王は彼らの訴えを真剣に聞き、何ら差別す

ることなく公平に対処した。

二人の話を聞いたとき、王は、どちらがうそを言っているのか、その口調や表情である程度分かったかもしれない。しかし王は、主観的な判断で安易にさばきを下さなかった。正しく、公平にさばくために、知恵を用いたのである。

二、愛に基づく知恵

遊女にとつて、妊娠することは決して喜ばしいことではなかった。父親は不明なので一緒に住めず(だから家には彼女たちしかいなかった)、育児の経済的負担をどうするか、心配していたかもしれない。しかし二人は様々な困難を克服して、出産にまで至った。二人とも生まれた赤ん坊を愛していたはずである。だからこそ、一方の女は自分の不注意で赤ん坊を死なせてしまつても、あきらめきれずに、取り替えたのだ。しかしそれは赤ん坊を自分のもの、自分の所有物と考えることであり、正しい愛の姿ではない。

王が(生きている子を二つに切り分け、半分をこちらに、もう半分をそちらに与えよ)と命じたとき、本当の

母は、〈どうか、その生きている子をあの女にお与えください〉と叫んだ。赤ん坊が生きていてさえくれたら、たとい自分が育てることができなくても良いと思ったからだ。それこそが正しい愛である。逆に、〈それを私のものにも、あなたのものにもしないで、断ち切ってください〉という女は、赤ん坊を物のように考えていた。万が一、この女が本当の親であつたとしても、彼女は赤ん坊を正しく育てることはできないだろう。王は、赤ん坊に対する母親の愛を信じて、このようなさばきをしたのである。

三、神から与えられた知恵

〈全イスラエルは、王が下したさばきを聞いて、王を恐れた。神の知恵が彼のうちにあつて、さばきをするのを見たからである〉。ソロモンの知恵は、彼自身から出てきたのではない。それは神から与えられたものだった。即位の直後、主が夢に現れたとき、彼は自分が「小さな子どもで、出入りする術を知りません」(7)と、その未熟さを認め、「自分のために長寿を願わず、自分のために富を願わず、あなたの敵のいのちさえ願わず、むし

ろ、自分のために正しい訴えを聞き分ける判断力を願った」(11)。主がその求めに応じて知恵を与えられたからこそ、遊女であつても公平に、また彼らの中にある愛を信じて、さばくことができたのだ。

自分の無能を知り、神の力に信頼することこそが信仰である。ソロモンが生涯、この信仰を持ち続けたなら、イスラエルの歴史は違ったものになっただろう。しかし彼は、周囲の国々の王女たちを妻としたため、晩年、「その妻たちが彼の心をほかの神々の方へ向けた」(11・4)。政略結婚は、信仰を否定することだったのである。

結論

ソロモンの知恵は確かにすばらしいものだった。しかし主イエスは、「しかし見なさい。ここにソロモンにまさるものがあります」(マタイ12・42)と仰せられた。確かに、「キリストは、私たちにとって神からの知恵」となれた(1コリント1・30)。主イエスを信じる者こそ、ソロモンにまさる知恵者である。謙遜にこの知恵を求め続けようではないか。

研究資料

(石田高保)

「ソロモンの知恵」と人の口にものぼるように、ソロモンが並外れて知恵ある王であったことは、一般的にも知られています。それが神話化されてソロモンは不思議な指輪を持っており、それによってどんな動物とも話しできたという伝説も生まれたほです。今日の個所は、彼に授けられた神の知恵を具体的に伝えるエピソードです。彼は王なる裁判官として、おびただしい知恵深い判決を下したことでしよう。ソロモンの手によると言われている蔵言しんげんにも、その賢明さが遺憾なく表されています。

テキスト

16 二人の遊女が王のところに来て、その前に立った王の前とは、いわば最高裁判所です。地方で長老や役人たちが司る下級裁判所では取り扱いかねる難題であったことがうかがえます。遊女でも王に訴えることができたほど、裁判はすべての人に開かれていました。イスラエルの王は、士師時代の「さばきづかさ」が発展したもので、長老たちの助言を得ながら、行政、司法、軍事を一元的に掌握しており、その責任を主なる神に負っています。

した。

18 家には私たちのほか、だれも一緒にいた者はなく、私たち二人だけが家にいました。当事者である二人以外に第三者の目撃者や証人のいない事例なので、裁判は困難を極めます。

20 このはしめが眠っている間に、私のそばから私の子を取って自分の懷に寝かせ、死んだ自分の子を私の懷に寝かせました。自分が見ていないにもかかわらず、相手の仕業であると決めつけているのは、母親としての直感が働いたからでしょう。

22 女たちは王の前で言い合った。二人の口論が激しさを増し、第三者にとっては当事者以外に証人がいない場合、ふつうは迷宮入りです。ところがソロモンにはそれを見分ける力がありました。

24 王が「剣をここに持って来なさい」と言った。当事者の言葉だけでは判断できないと見た王は、思いがけない態度に出ます。その場にいる誰にでも分かる方法で判断しようとした。

25 生きている子を二つに切り分け、半分をこちらに、もう半分をそちらに与えよ。ソロモンは子どもに対する

母親の気持ちを察したのでしょう。この言葉が事の真偽に決着をつけることになります。神の知恵を授けられたソロモンの面目躍如です。

26 すると生きている子の母親は、自分の子を哀れに思って胸が熱くなり 直訳としては、「彼女のほらわたしは熱くなった」。実の母は、わが子が殺されるくらいなら相手の女に渡してでも生きてくれるほうがまだ、という焼けるような思いで王に申し出ます。いっぽう相手の女は、それを私のものにも、あなたのものにもしないで、断ち切ってください と冷たく言い放ちます。自分の子でないから死んでもかまわないという意味です。ソロモンは、このような二人の反応の違いをあぶり出すことによって、本当の母親を見抜くことができました。まさに「王の唇には神々しさがある。さばくときに、その口は神の信頼を裏切らない」(箴言16・10)とあるとおりです。

28 全イスラエルは、王が下したさばきを聞いて、王を恐れた これは人間の能力を超える判決であったので、一同はソロモンに神の知恵が授けられていることを悟りました。またどんな悪事もソロモンの前ではあばかれてしまうという神への畏れを抱きました。

神の知恵が彼のうちにあって、さばきをするのを見たからである ソロモンは事実、状況や前後関係に対する靈感された洞察力をいただいていたと言えるでしょう。新約的に言えば、これは御霊の賜物の「知識のことば」に当たるかもしれません(1コリント12・8)。正しい裁判をすべき王として、「聞き分ける心をしもべに与えてください」(9)、「正しい訴えを聞き分ける判断力」(11)が、彼の求めに従って与えられたと見るべきでしょう。そのほか、ソロモンの知恵に関する聖書の記述は以下のとおりです。「神は、ソロモンに非常に豊かな知恵と英知と、海べの砂浜のように広い心を与えられた。ソロモンの知恵は、東のすべての人々の知恵と、エジプト人のすべての知恵にまさっていた。：ソロモンは三千の箴言を語り、彼の歌は一千五首もあった。：彼の知恵のうわさを聞いた世界のすべての王たちのもとから、あらゆる国の人々が、ソロモンの知恵を聞くためにやって来た」(4・29、30、32、34)。ソロモンならずとも、主に頼って生きるための知恵を求めるなら、どんなに自分に自信がなくてもタイムリーに授かることができます。

参考図書 『ティンデル聖書注解』、『実用聖書注解』。

聖書

1列王12・1〜19

タイトル

王国の分裂

暗唱聖句

愚か者には自分の歩みがまっすぐに見える。しかし、知恵のある者は忠告を聞き入れる。
箴言12・15

目標

神からの勧めに耳を傾け、従う。

導入

(土屋開夫)

子ども的小伙伴们も知っているかも知れませんが、今、世界は大変な事になっています。戦争が起きたり、ある国が他の国を支配しようしたり、ミサイルを飛ばして脅かしたりしています。そういう国のリーダーたちに、「そんなひどい事、もうやめてください!」と忠告する部下や大臣などはいないのでしょうか? いるかも知れませんが、国のリーダーたちは耳を貸さないのかも知れません。

もし、「俺のしている事は正しい。俺の考えや判断に間違いはない」と思っているとしたら恐ろしいことです。誰でもどんな人でも、「私の考えはいつも絶対に正しい。私に間違いは無い」と言うことは出来ません。いつも間

違いのない正しい人間は一人もいません。そんな事を言えるのは、本当の神様だけです!

だから私たちは、いつも正しい神様に正しい道や判断をお聞きする必要がありますのです!

今日の個所は、神様に聞けなかった愚かな王様のお話です。

愚かになった ソロモン王

先週はソロモン王様のお話でしたね。ソロモン王は、神様から素晴らしい知恵をいただき、イスラエルの国をよく治めていました。ところが、歳をとっておじいさんになった頃、とても残念な事に、偶像を拝むたぐさんの奥さんたちにそそのかされて、ソロモン王も偶像を拝むようになってしまいました! 誰よりも賢かった筈のソロモン王が、愚かになってしまったのです!

なぜでしょう? 本当の神様に「聞く事」をやめてしまったからです。そして偶像を拝む奥さんたちの言う事を聞いてしまったのです。(ソロモン王は最後には悔い改めて、「伝道者の書」を書いたと言われています。)

愚かな息子 レハブアム王

さて、そのソロモン王が死んだ後、息子のレハブアムが王様になるのですが、その時、ソロモン王の家来だったヤロブアムが国中のみんなと一緒にやってきました。そしてお願いしました、「あなたは、父上が私たちに負わせた過酷な労働と重いくびきを軽くしてください。そうすれば、私たちはあなたに仕えます。」(4)

ソロモン王は国を豊かにするために、皆をまるで奴隷のように働かせていましたが、それを軽くしてください、と言うのです。

レハブアム王は家来たちに相談しました。すると長年仕えてきた家来たちはこうアドバイスしました。簡単に言うと、「民に、優しく親切に答えてください」と。

一方、若い家来たちはこう言いました、「民に、父上よりもっと厳しく答えなさい」と。皆さんだったらどうしますか？

レハブアム王は、神様に聞くべきでした。「この人はこう言っています。あの人はこう言っています。でも、主よ、あなたの御心は何でしょうか？」と。

けれどもレハブアム王は、神様に祈りもせず、民に厳

しく答えました。すると、国のみんなは失望し、腹を立て、レハブアム王から離れて行きました。そして代わりに、家来だったヤロブアムを王様にしました。その結果、今まで一つだったイスラエルの国は、北と南に分裂してしまったのです。

まとめ

今日の暗唱聖句、箴言12・15にはこうあります。

「愚か者には自分の歩みがまっすぐに見える。しかし、知恵のある者は忠告を聞き入れる。」

(皮肉にもこれはソロモンの言葉ですが、みことを聞いても、語っても、実行しなければ意味ありません。) 最初に言ったように、まず自分がいつも正しい判断ができると思わない事です。そして人に相談する事も大事ですが、一番大事なことは、神様にお祈りし、みことばを聞くことです。そして優しいイエス様がいつも私たちのお手本である事を忘れないでください！

♪わたしさえも愛して♪ (PW27)

聖書 I列王12・1～19 テーマ 王国の分裂

序論

(石田高保)

自分と異なる意見を受け止めたり、議論を深めてより良い結論に導いたりすることは、謙遜と寛容と忍耐を要するものです。

一、反対意見を退ける危うさ

ソロモン王の後半生は太平に馴れ、宮廷生活も派手になり、放漫財政のつけを重税で補ったため、民衆に怨嗟えんさの聲が上がるようになります。そこでイスラエル十部族の長老たちは、レハブアムに代替わりすると先代への不満から、ヤロブアムを王に担いで独立しようとなりました。レハブアムのところに、ヤロブアムと長老たちがやってきて、労役と税金を軽くしてほしいと願い出ました。もし要求がねつけられたら、こちらは自立する口実になると計算していたのです。するとレハブアムはまず父ソロモンに仕えた老臣たちに相談しました。彼らは王に、代表者たちの願いを受け入れなければ、十部族は離反すると警告します。彼らは長い統治経験から、十部族の不満が高じており、彼らを

むげに扱うなら国が分裂しかねないと予想していました。まずは長老たちの要望に耳を傾け、寛容な政治を行うことが肝要だと答えます。

ところがレハブアムはその意見が気に入らなかったのか、同世代の若い側近たちに相談します。自分の考えに賛同してくれそうな家臣に同調してもらおうとしたのでしょう。実は最初から重臣に聞く耳を持つていなかったのです。すると側近たちはソロモン王の時よりもっと労役と税金を重くすべきだと進言します。なぜなら王が民の要求にすんなり応えれば権威が下がり、見くびられるとも考えたのでしょう。不幸なことにこの進言がレハブアムの気持ちを固めました。彼らは老臣の経験知を軽んじました。そこで王は彼らの進言とは正反対の決断を下します。しかも高圧的、挑戦的なものの言い方をし、十部族の長老たちをすっかり怒らせ、王国の分裂を決定づけてしまったのです。

この一度の判断が王国を数百年に及ぶ分裂に導くことになろうとは、レハブアムやその側近たちも想定外のことだったでしょう。分裂の直接の原因をつくったのは彼らですが、もとはと言えばソロモン王が徐々に偶像礼拝に傾き、もはや引き返せないところまで行ったとき、主が預言して

おられたことです(11・11)。近くは主が預言者とおしてヤロブアムに伝えられていたことでもあります(11・31)。それらの預言がレハブアムと側近たちの不敬虔と経験不足からくる軽率さや自己過信と絡み合って、はからずも成就してしまいました。

二、反対意見を聞くという知恵

若い人が年配者の考え方を古臭いと考え、年配者は若い人の考えを未熟なものと決めつけやすいことは古今東西を問いません。「今の若い者は…」という言葉は古代から変わリません。けれども年配者の言うことだけを聞いていたら社会に変革は起きませんし、若い人の言うことだけを聞いていたら社会は不安定になるでしょう。保守的な要素も、進歩的な要素も社会にはバランスよく必要です。たとえば年配者が自分の地位と立場にものを言わせて若い人の意欲やビジョンを抑えつけるとしたら、それは老害というものです。そのようなリスクはあるものの、年配者の考えが常に正しいわけではないのですが、若い人より失敗の多い分、経験知も多く、おおむね生きる知恵に富んでいると言えます。ですから若い人はそのことのゆえに年配者を尊敬し、耳を傾けるという知恵を身につけるべきです。「父

親に対するように」(イテモテ5・1)。普通の社会生活では自分が100パーセント正しくて相手が100パーセント間違っているということは滅多にありません。ひよつとした自分にも誤りがあるのではないかと自省し、人にも相談するという謙虚さが欲しいものです。またそれを仲間内に検証してもらっただけでなく、自分より経験のある人に相談すべきでしょう。そのような人間関係を持っているなら、大きな判断ミスから免れるでしょう。

結論

誰でも自分のアイディアや主張や計画を持っており、その実現を誰にも邪魔されたくないのです、人のアドバイスや忠告に耳を傾けることは簡単ではありません。また自分一人で成功したいという野心が潜んでいるなら、なおさらです。しかし自分の邪魔をするかのように見える人の言葉も受け止め、議論を深める過程で、創造的なアイディアに至ることがあります。使徒行伝15章のエルサレム会議がそうであったように、クリスチャンどうしの会話や教会のミーティングの中に、人知を超えて聖霊が最善に導いてくださるのを見ることがあります。

研究資料

(小平徳行)

ソロモンの40年に及ぶ治世が終わり、その子レハブアムが王位を継承した。しかしイスラエル王国は南北に分裂する。この箇所は、分裂の直接的要因となる出来事を記している。

テキスト

1 レハブアムはシエケムに行った。全イスラエルが彼を王とするために、シエケムに来ていたからである。ソロモンの後、レハブアムが王となったことが前章末に記されているが、これは実質的にはユダの王権を受けたにすぎなかった。ソロモンの息子が即位することは、継承順位において至極正当なことであったが、全イスラエルの王として就任するためには北の十部族側の承認を得ることが必要であった。北の部族はソロモンの圧制のもとで反抗的になっていたのである。このような手続きを取ったのは、恐らくソロモン治世末期の北の分裂を憂慮した長老たちの配慮に基づくものと考えられる。シエケム パレスチナのほぼ中央、ゲリジム山の東側斜面に位置しており、イスラエルのカナン入国後、重要な場所と

なっていた(ヨシユア24・1)。そしてしばらくは分裂後の北王国の首都となった(12・25)。

2 ネバテの子ヤロブアムは、まだソロモン王の顔を避けてエジプトに逃れていた。ヤロブアムはソロモンの家来であったが、敵対したゆえに、ソロモンから命を狙われ、エジプトに逃れていた(11・26、40)。

3・4 今、あなたは、父上が私たちに負わせた過酷な労働と重いくびきを軽くしてください。北の諸部族はレハブアムに対して、彼を自分たちの王として認めるための条件を提示した。事態の改善を求めたのは、それだけイスラエルの人々にとっても、ソロモンの時代の強制労働や重税に対する不満が激しかったことが想像される(参照9・15以下)。

6・7 長老たち 彼らの地位はイスラエルにおいて古くから特別なものであり、尊敬されていた。この長老たちは、北の諸部族の要求をくみ取って譲歩するよう勧めた。彼らはソロモンの失敗を憂慮していた人々である。ソロモンの罪に加担するようなこともあったかもしれないが、この時、南北の分裂の危険性を感じ取っていたようである。この民のしもべとなって イスラエルの

王は、しもべとなって仕えることによって、王たり得る。これは他国にはない独特の考えであった。主にあつては、王も民も仕え合うことが本質的なあり方である。イエスはしもべなるメシアとして、このことの最も良い模範である（マルコ10・42～45）。親切なことをかけ直訳するならば「良い言葉を語る」「良い」（ヘトーヴ）は「善い、快い、嬉しい」などの意味がある。聖書協会共同訳は「利益になることを約束される」。

8～9 王はこの長老たちが与えた助言を退け、しもべとなつて仕えることはレハブアムの意に沿わなかつたようである。自分とともに育ち、自分に仕えている若者たち、この時、レハブアムは41才であり（14・21）、若い集団と与しやすかつた。

10～14 私の小指は父の腰よりも太い 若者たちの助言は、格言的なものを用いている。これにより、レハブアムは自分が父親よりも比較にならないほど強いかなのような優越感と権力意識を吹き込まれた。その結果、北の諸部族の要望を聞いて譲歩するのではなく、さらに過酷な取り扱いをすることを宣言する。彼らの助言はバランス感覚を失った傲慢なものであったが、レハブアムも容易

に彼らの考えになびいてしまった。サソリでおまえたことを懲らしめる、これはさらに過酷な労働に追い立てるために、通常のむち打ちに対して、とげなどのついた懲罰用具を用いて懲らしめることを意味する。

15 かつて「主」がシロ人アヒヤを通してネバテの子ヤロブアムにお告げになった約束を実現しようと、「主」がそう仕向けられたからである 11・29～39。イスラエル王国の南北分裂に至る直接的な要因は、レハブアムの理解しがたい愚かな対応にあつたが、これは主のご支配のもとにあつた。分裂の真相は、ソロモンの不従順（11・1～13）に対する神の裁きの成就であつた。

16 全イスラエルは ユダとベニヤミン族を除く民。ダビデのうちには、われわれのためのどんな割り当て地があるうか 彼らの答えは、自分たちの立場が正當に認められないことの確認であるとともに、いかなる和解をも完全に拒絶するという態度を示唆している。

参考図書 ドナルド・J・ワイズマン『ティンデル聖書注解 列王記』、舟喜信『新聖書講解 列王記』（以上のちのことば社）、他

聖書

Ⅱ歴代32・9～22

タイトル

ヒゼキヤ

暗唱聖句

彼とともにいる者よりも大いなる方が、
私たちとともにいてくださるからであ
る。
Ⅱ歴代32・7

目 標

大いなる神の守りを信じて生きる。

導入

(土屋開夫)

「うわー、大変だ！ 困った！ どうしよう！」

皆さんは、そんな「ピンチ」になった事がありますか？
先生も今まで、小さいピンチから大ピンチまで数え切れ
ない程のピンチに会いました。皆さんが今までで一番大
変だった大ピンチはなんですか？（子ども達のピンチ話
を聞いたり、CS教師の体験を短く話してもよい。）

でもね、こういう言葉があります。「ピンチはチャン
ス！」これを私たちに当てはめると、私たちはピンチの
時、「神様、助けて下さい！」と、いつも以上に必死に、
真剣にお祈りします。そうすると神様がその必死のお祈
りに応えて下さって、思いがけない、素晴らしい助けを
与えて下さるのです！ 今日、登場するヒゼキヤ王様も

そういう出来事がありましたよ。

神様を敬うヒゼキヤ王様

先週はレハブアム王様のお話をしましたね。ソロモン
王様の後、残念ながらイスラエルの国は北と南に別れて
しまいました。ちなみに、正当な王様の血筋は南のユダ
王国にあります。でも、ユダ王国の王様がみんな神様の
前に正しく歩んだかというと、そうではありませんでし
た。偶像を拜むような悪い王様もたくさんいました。

でもその中で、今日のヒゼキヤ王様はとても素晴らし
い王様でした。Ⅱ歴代の29・2には、「彼は、すべて父祖
ダビデが行ったとおりに、【主】の目にかなうことを行っ
た。」と書いてあります。ダビデ王様のように、神様を信
じ、敬う王様だったのです。ヒゼキヤ王様は、偶像を壊
し、神の宮である神殿をきれいに整えて、もう一度ちゃ
んと礼拝がささげられるようにしました。そのようにヒ
ゼキヤ王様は、神様を一番にしていました。

正しい人にも試練が

さて、そのようにヒゼキヤ王様が神様の前に良い事、
正しい事、忠実な事を行った後、大ピンチがやってきま
した。とても強いアッシリアという国の大軍団がユダの

国を滅ぼそうと迫ってきたのです！

「えっ、神様を一番に敬っている人にもピンチがやってくるの？」と、皆さんは思うかも知れませんか。そうですね。神様を敬う人、イエス様を信じる人にも、ピンチはやってきます。父なる神様は私たちを愛しているからこそ、ピンチを与えて私たちの信仰をテストしたり、訓練したりされるのです。イエス様も、弟子たちを嵐の舟に乗せて訓練された事がありますね。

アッシリアの大軍は今にも襲いかかって来そうですね。ヒゼキヤ王様は怖くなかったのでしょうか？ 勿論、怖かったと思います。でも、だからこそ神様を信じ、勇気を出しました。そして国の人々を励まして言いました、「強くあれ。雄々しくあれ。アッシリアの王や、彼とともにいるすべての大軍を恐れてはならない。おのいてはならない。彼とともにいる者よりも大いなる方が、私たちとともにいてくださるからである。」

私たちが頼みとしていらっしゃる方は、この宇宙を造られた父なる神様だ！そして死と悪魔に打ち勝った神の御子イエス様だ！この神様が私たちの味方なのだから、何も心配いらない、大丈夫だ！と信じる事がとっても大

切です。恐れに打ち勝つ信仰です！

そしてヒゼキヤ王様は預言者イザヤと一緒に、必死にお祈りしました。一人でお祈りするより、誰かと一緒にお祈りすると、そのお祈りはもっと力強くなります。

そうして祈ったら、スゴイ奇跡が起きました。なんと神のみ使いがアッシリアの大軍（十八万五千人）をやっつけてくれたのです！（その方法は伝染病だったとも言われています。）アッシリアの王様は国に逃げ帰り、なんと自分の息子に殺されてしまいました。ユダの国は神様によって守られたのです！

まとめ

子どもでも大人でも、必ず色んなピンチがやってきます。でも、覚えていて下さい。神様を信じ、イエス様を信じている私たちには、乗り越えられないピンチは一つも無いのです！ピンチの時は、信じて、一生懸命に祈って下さい。なんでもできる神様とイエス様が、あなたの味方なのです！

♪歩こうイエスの道を♪（PW15、イン81）

聖書 II 歴代 32・9～22 テーマ ヒゼキヤ

序論

(石田高保)

ヒゼキヤ王の時代にふりかかったアッシリアによる侵略に対して、神様がどのように介入して下さったかを調べて、現代にも働いている神様のみわざを体験したいと思います。

一、神への信頼から出る勇氣

「これらの真実なことが行われた後」(32・1)、ヒゼキヤ王は先代が国じゅうにまん延させた偶像礼拝を神への熱心に燃えて一掃しました。宗教改革を立派に成し遂げたわけです。こうして国内が治まったと思ったら、今度は外患に悩まされることになります。北方の強国アッシリアが大軍を率いてユダ王国を侵略し、エルサレムに迫ってきたのです。これを知ったヒゼキヤは、城壁を二重にして防御を固め、城外の水源をふさいで敵が水を得られないようにしました。アッシリアの強大な軍事力を考えれば、戦わずして降伏し、屈辱であっても講和するほうが現実的です。しかしヒゼキヤは圧倒的な敵に抵抗する道を選びました。これ

は彼の蛮勇でしょうか。そうではありません。万軍の主なる神様に信頼していたからです。そのことは民に対する演説からうかがえます。「私たちとともにおられる方は、私たちの神、【主】であり、私たちを助け、私たちの戦いを戦ってください」(8)。これを聞いた民から恐れは消え、どれほど王を頼もしく思ったことでしょう。ヒゼキヤは崖っぷちに追いやられながらも恐れと向き合い、主により頼むことによって踏みとどまっています。これは並外れて勇氣のある行為です。大軍の前に恐れおののく民を落着かせ、人心を一つにまとめました。この奇跡的な勇氣とリーダーシップはどこから来るのでしょうか。言うまでもなく彼より頼んでいる神ご自身からです。ヒゼキヤは目に見えないお方を目に見えるように見る信仰を授かり、現実を超越する神の勝利を見ました。

ほどなくアッシリアの將軍ラブシャケがエルサレムにやってきて、無駄な抵抗はやめて降伏せよと脅しをかけます。われわれの神はお前たちの神よりはるかに強いのだから、早く諦めよというわけです。この当時、外国に負けるのはその国の神が弱いからだと考えられていました。彼は知らないで天の神を敵に回したわけでは

二、想像をこえる祈りの答え

絶体絶命の中で王は預言者イザヤと共に祈ります。するとその日の夜、御使いが現れてアッシリアの将兵18万5千人を撃ち殺し、一人も生き残りませんでした。まるで出エジプトの時のようです。詳細はⅡ列王19章に記されていますが、ここではたった二節で簡潔に彼らの祈りとその答えが記されています(20、21)。自軍の全滅を目の当たりにしたアッシリアの王は面目を失い、失意のうちに都へ戻ると、今度は息子たちから殺されてしまいます(Ⅱ列王19・37)。いつぼうヒゼキヤ王は鮮やかな主のみわざに驚嘆し、夢を見ているような心持ちだったでしょう。祈りと願いをはるかにまさる形で神様が解決して下さったのです。

よくよく考えてみると、私たちの祈りというものが予想どおりに叶ったことは一度たりともなかったのではないのでしょうか。いつでも私たちの想像を超える形で実現されてきたはずです。「わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い」(イザヤ55・9)とあるように、広大無辺な神の世界を覗く^{のぞ}人間^のの霊の窓はきわめて小さいために、そのほんの一部分しか見ることができません。つまり予想できる範囲も狭く、選

択肢もわずかしか思い浮かべることができないのです。ところが神様のほうは全知ですから人間とは比べようもなく広い世界を見ておられ、選択肢も無数にお持ちです。その中から私たちのために最善の道を選択し、最善の状況に整え、最善のタイミングで祈りの答えをお与えになります。ですから祈りのこたえられ方は、一つの例外もなく私たちの想像を超えているのです。裏をかいているのはありません。

結論

そういうわけですから、私たちが何かの課題について祈るとき、神様が私たちの想像を超える形で答えて下さると期待してよいのです。しかも神様は無限の愛にあふれる父親として私たちに接してください。目に入れても痛くない子どもである私たちのためには、何でも叶えてあげたいと思っておられます。もちろん私たちの願うとおり、すぐに叶うわけではありませんが、神の親心は出し惜しみすることなく、もったいぶることなく、恩着せがましくもなく、気の遠くなるほど気前が良いのです。期待して祈ってゆきましょう。

研究資料

(小平徳行)

アッシリアの侵入（BC 701年）はユダ王国にとってバビロン捕囚以前の最大の脅威であった。これに対しヒゼキヤは、給水施設を保護し、城壁を築き直し、防備を整え、神を信じるように励ました（3～8）。Ⅱ列王の並行箇所では、ヒゼキヤはエルサレム陥落を恐れ、神殿の財宝でアッシリアと融和しようとした弱気な面も記している（Ⅱ列王18・13～16）。この出来事は、ヒゼキヤの徹底した宗教改革（29～31章）の後に起こった。神に忠実に従おうとする時、信仰の試みを受けることがある。

テキスト

9 アッシリアの王センナケリブは、その家来たちをエルサレムに遣わした。：家来たちは、ユダの王ヒゼキヤとエルサレムにいたすべてのユダの人々に告げた ユダの民はヒゼキヤの信仰の言葉に安心したが（8）、敵は民の信仰を奪おうと誘惑してきた。

10～15 この演説は、Ⅱ列王に記されているものより簡潔にまとめられているが、その中心は、イスラエルの神

もアッシリアが打ち破ってきた他の国民の神々と同様に無力であるゆえに、神に頼まず、降伏せよということであった。センナケリブの目的は、イスラエルの神への信頼を崩すことにある。この一連の敵の脅迫による攻撃は、サタンの方法そのものである。

11 飢えと渇きで、おまえたちを死なせようとしているではないか 真の豊かさをもたらす神に対する侮辱。

12 ヒゼキヤとは、その高き所と祭壇を取り除いて：と言った者ではないか ヒゼキヤの宗教改革について言及している。これはヒゼキヤの忠実さに対する挑戦であった。

13～15 私と私の先祖たちがすべての国々の民にしていたことを知らないのか これまでのアッシリアの勝利に触れ、破れた国の神々は無力であったことを示し、同様にユダ王国の神もアッシリアから救い出すことはできないと述べている。当時、人々は自らの盛衰を彼らが信じている神の能力と密接に関わっていると考えていたゆえ、民が滅びたのは、民の神の無力さのゆえであると結論づけている。

17 イスラエルの神、**主**を侮辱し、主に逆らって言っ

た 主なる神に対する最大の侮辱は、主が他の神々、すなわち人の手で造られた、命なき無力な神々と同等のものにすぎないとされたことである(19)。しかし、同時にこのような神理解は、アッシリアの王や家来たちが霊的に全く無知であり、愚かであることを示している。

18 ユダのことは これはヘブル語のこと。Ⅱ列王18・

26では、エルサレムの高官たちがアッシリアの使者に、民が聞いても理解できないようにアラム語で語るよう懇願している。アラム語は当時の外交用語であり、ヘブル語はユダの方言であった。この懇願は聞き入れられず、使者はユダのことで大声で呼びかけたのである。アッシリアの主張を直接ユダの民に聞かせることは、民が自分たちには勝ち目がないと信じさせようとする心理作戦であった。このような敵の策略に対し、ヒゼキヤは民に対し、敵と論ずることを避け、黙するよう指示した(Ⅱ列王18・36)。

20 ヒゼキヤ王と、アモツの子、預言者イザヤは、このことについて祈り、天に叫び求めた この場面はⅡ列王19章の並行箇所と比べると、非常に短く、簡潔に記されている。そこには、ヒゼキヤが使いをイザヤに派遣した

こと、ヒゼキヤの祈りの内容、そしてセンナケリブの敗北を語るイザヤの預言等が含まれている。ヒゼキヤとイザヤは顔を合わせてはいなかったが、心を一つにして、ともに主の前に祈った。この戦いは、実際には「舌戦」といえるもので、両軍とも何の役割も演じていない。これは信仰の戦いであり、勝利はこの祈りの後に起こった。

21 【主】は御使いを遣わして、アッシリアの王の陣営にいたすべての勇士、指揮官、隊長を全滅させた 神は直ちに祈りに答え、敵軍を滅ぼされた。ここには敵の受けた被害については記されていないが、一夜のうちに18万5千人が撃ち殺された(Ⅱ列王19・35)。王は恥じて国へ帰り、自分の身から生まれ出た者たちが、そこで彼を剣にかけて倒した。ここにセンナケリブの死についても言及されている。イザヤの預言通りである。これはセンナケリブが帰国して20年後(BC 681年)の出来事である。これも祈りに対する神の答えであった。祈りの答えを、長期的な視点からも見る必要がある。

参考図書 マーティン・J・セルマン『ティンデル聖書注解 歴代誌第2』(いのちのことは社)、他。

聖書

ヨハネー・15、9、14

タイトル

すべての人を照らす光

暗唱聖句

すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。ヨハネー・9

目 標

心の闇を照らしてくださるイエス様を、救い主として信じ受け入れる。

初めにことばがあった

(櫻井めぐみ)

みんなは、ニワトリと卵、どっちが先か知っていますか？ニワトリは卵から産まれるから卵が先？でもその卵を産むのはニワトリです。難しい問題かもしれません。でもこの答えは、聖書に書いてあるんです。はじめに神が天地を創造され、そして生き物を造られました。創世記の1章を見ると、神は卵を造ったとは書いていないのです。神ははじめに天と地、海を造り、そこに生き物を生じさせました。よって、最初にできたのは卵ではなく鳥なのです。では、もう一つ質問します。「言葉が先か。考え(思考)の方が先か。」これはどうでしょう。ふつうの考えとしては、やはり思考の方が先にあって、それを表すために言葉があると考えます。でも聖書には、「初めにことばがあった。こ

とばは神とともにあった。ことばは神であった。」と書かれてあります。「ことばは神であった」ってどういうことなんでしょう。みんながこの意味を理解するためには、ギリシャ語について知ってもらわなくてはなりません。新約聖書は、もとはギリシャ語で書かれたからです。日本語で「ことば」と訳されているのはギリシャ語のロゴスという語です。では、ロゴスとは一体何なのか？日本語で「言葉」といったら、何かの意味を表すために、口で発音したり、文字で書いたりするものだという意味しかありません。でも、ギリシャ語のロゴスという単語で辞書を見ると、ものすごくたくさんの意味が書いてあるのです。「言葉・言語・話・真理・真実・意味・事実・説明・理由・文字・口・声・名声・原因・自然・物質・精神・思考内容・熱意・計算」こんな感じで、全部でなんと50個以上もの意味が「ロゴス」にはあるんです。私たちがふつう考えている言葉そのもののだけの意味ではないことがわかりますね。だから、昔のギリシャの人たちは、こう考えていたのです。全宇宙にあるすべての物は、それが形となって存在する前から、考え・思考において存在していた、と。これはギリシャの哲学者たちの考えです。でも、聖書には、それよりずっと

深いことが書かれています。「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」つまり聖書は、全宇宙にあるすべての物の背後には、思考や考えだけでなく、考える方がおられたのだ、と言っているのです。ですから聖書で「初めにことばがあった」の「ことば」とは、イエス・キリストのことなのです。

すべての人を照らす光

イエス様は創造主であり、初めから、父なる神とともにおられた、神と等しいお方です。創造されたものはみな、自分でいのちを保っているではありません。この「ことば」であるお方によっていのちを保っているのです。私たちは本来、ただ生きるだけではなく、自分が生きている意味を知って生きるように造られました。でもそれは、神様とつながることによって可能となるのです。もちろん神様を信じていなくても、肉体は生きています。でもそれは、実は死んでいるのと同じなのです。つまり、体は生きていなければならないのと同じなのです。様々なことで人は傷つき、そして疲れ切っています。生きていくために一生懸命がんばっていても、結局それは一体何の

ためなのか。それはもちろん、生活のためだといえるでしょう。食べていくため。生きるため。でも、それならなぜ生きるのか。人間はどんなにがんばって苦勞してみたところで、いずれ必ず死ぬわけで、でもそれならなぜ生きているのか。ただ、なんだかわからないけれど、自分はこの世に生まれてきて、なぜだかわからないけれど、体のいのちがあって生きている。だからよくわからないけれど、そのいのちを自分で一生懸命保っています。この、自分の体をただ生かしていくこと以上に、生きていることの意味を見出せない。これが、霊において死んでいるという状態なのです。でも、私たちがイエス様に出会う時、生きる意味を見出します。イエス様が私たちの光です。罪人である私たちのために十字架で死なれ、永遠の、豊かないのちを与えてくださいました。そして今では、信じる私たちを導き、ともにいて歩んでくださいます。クリスマスは、「すべての人を照らすことの光」であるイエス様が、人となってこの世に生まれてくださった時です。このイエス様を私の救い主として、信じ受け入れましょう。

♪神の御子は♪(新聖歌75)

聖書 ヨハネ1・1～5、9～14 テーマ すべての人を照らす光

序論

(福井文彦)

クリスマス之夜、大きな星がひときわ輝いたという出来事は、私たちに心温まる思いを与えてくれます。ヨハネは、福音書の冒頭で〈すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた〉と、キリストの誕生を紹介しています。この光であるキリストを信じ受け入れるとき、私たちは新生し、神の子とされるのです。

一、いのちなるキリスト

ヨハネは、キリストのことを〈初めにことばがあった〉と、「キリスト」と言わないで、「ことば」と表現しました。当時、すでにキリスト教がユダヤ人の間だけでなく、異邦人の間にも広がっていました。ですから、彼らには、「ことば」(ギリゴス)の方がよく理解できたのです。

この「ことば」であるキリストは、〈初め〉から存在されたお方でした。それは、時間の最初、歴史の最初という意味ではありません。時間が始まる以前、つまり創造のみわざを開始されたその時からご存在されたお方でした。

た(3)。このキリストは〈神とともにあった〉お方です。すなわち、キリストは永遠の神であり、父なる神と永遠の交わりの中におられたお方なのです。

〈この方にはいのちがあった〉とは、単なる法則や原理のようなものではありません。この命は、肉体的命、霊的な命、永遠の命です。キリストを信じるとき、命が与えられ、死から命へ移されます(ヨハネ5・24)。〈このいのちは人の光〉でした。〈闇はこれに打ち勝たなかった〉のです。闇の中に光が差し込んでくると、闇は姿を消します。しかし、光の中に、闇は入ることはできません。闇が光を駆逐することはできないのです。

二、光なるキリスト

〈すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた〉とあります。キリストの来臨は、私たちに神を現わし、啓示するためでした。光は物を照らして見えるようにします。そのように、光なるキリストによって、心の目が開かれて、彼を通して、神がはつきりわかるようになるのです。

また、キリストは、闇の中にいる者に光を与えます。ヨハネによる福音書には、光を与えたイエスの業が二つ

記されています。その一つは「罪を赦された姦淫の女」(8章)のことで、もう一つは「光を与えられた盲人」(9章)の出来事です。

「姦淫の女」の話は、二重の意味で人間の暗黒を表しています。一つはイエスと女を訴えている群衆で、彼らは自分の罪を棚にあげてただ訴えているのです。もう一つの暗さは、罪を犯した女です。彼女は自分の罪が白日の下にさらされて、身の置きどころもなかったと思います。しかし、キリストは彼女に「わたしもあなたにさばきを下さない。行きなさい」(8・11)と言われました。キリストの十字架は、今も信じる者の心に、どんな罪も赦される、闇に打ち勝った光として輝いています(5)。

三、キリストを受け入れる者の特権

〈まことの光〉の、〈まことの〉という言葉は、ギリシャ語では「アレーシノス」で、「真実な」とか「本当の」という意味です。キリストは、暗黒の世界に輝く唯一本当の光として来られました。

しかし、この世の人々はキリストがこの世に来られた時、キリストを認めることができませんでした。それは、人間が罪を犯し神から離れているため、キリストを認め

たくなかったのです。別の言い方をすれば、霊的に盲目な人は偏見をもっていて、真理に敵対してしまうのです。

ですから、キリストが〈ご自分のところ〉に来られたのに、ご自分の民は受け入れませんでした。ここで〈ご自分のところ〉とは「ご自分の国」のことで、イスラエルのことです。それで、イスラエルの民はキリストを信じることなく、十字架につけて殺してしまいました(マタイ21・33〜40)。

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。〈特権〉とは「資格」(新共同訳)、「権能」(聖書協会共同訳)とも訳されています。たといだれであっても、謙虚にキリストを知り、この世界の主、また自分の救い主として受け入れる人は、神が恵みによって、神の子どもとしての特権を与えてくださいます。

結論

イエス・キリストは、すべてを照らす光としてこの世に来てくださいました。彼は神を現わし、それだけでなく罪を赦し救い、神の子となる特権を与えてくださるのです。

研究資料

(井上義実)

ヨハネが記す神が人となられた受肉、イエスの降誕である。ヨハネの筆致は、簡潔で美しく、詩的である。

テキスト

1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった この書き出しに際して、ヨハネの念頭には天地創造の創世記1・1があったであろう。ヨハネによる福音書の主題は人の新たな創造である。ことば(ギリゴス) ヨハネはロゴスを普通の会話の言葉としても用い、イエスが語った言葉、神の言葉としても用いている。さらに重要なこととして、ロゴスはイエスそのものである。イエスは受肉した言葉であることをヨハネは独自に述べている。「初めに」という語はイエスの永遠性、すべての前にすでに存在されていた先在性を表している。1節後半は、イエスが神であること、父なる神との人格的な交わりを持つことを記している。ヨハネはロゴスという独自の表現で、キリスト論の根本を最初に提示している。早くも一世紀には正統的なキリスト論を覆すグノーシス派の異端が入り込もうとしていた。今

に至るまで異端的なキリスト観は現れ、また消えていく。
3 すべてのものは、この方によって造られた 創造者は父なる神であると考えがちであるが、創造のわざはイエスとの共働でなされた。神は「光、あれ」との言葉を最初に、言葉によって創造の業をなされている。全宇宙は神の言葉(ロゴス)であるイエスによって創造された。イエスは創造者であり、全宇宙の主権、統治、支配をお持ちのお方である。

4 この方はいのちがあった いのち(ギリゾーエー) 新約聖書で「いのち」と訳される語は(ギリゾーエーと(ギリプシケーに大別される。共に、様々な意味を持っているが、地上の命を越えた、永遠にいたる神からの命は(ギリゾーエーに含まれている。イエスは神からの命を持ち、人に分かち与えるお方、霊的な命の源泉である。ヨハネは神からの命を巡って、この福音書を記している。このいのちは人の光であった 光(ギリフォース) 聖書は神の栄光の輝きを記す。光は神の本質である。神は光を照らし、光を示すお方である。イエスは光としてこの世に来てくださり、光に従う者に神からの命を与えて、光に生きる者としてくださる。

5 光は闇の中に輝いている ヨハネは霊的な意味合いでの闇を語る。神と離れるならば、闇は深くなる。罪は暗闇に属し、悪の力は闇の力である。闇はこれに打ち勝たなかった イエスの光は、どんなに深く、濃い闇をも照らす神の光、命の光である。

9 すべての人を照らすそのまことの光 まことの(ギ)アレーシノス) 人についても用いられるが神の本性として多く用いられる。すべての人を照らす イエスは全人類を照らす光である。イエスの光は十分であるが、残念ながら光に背を向け、光よりも闇を愛する者もいる。

10 この方はもともとから世におられ…世はこの方を知らなかった イエスがクリスマスにこの世に生まれる以前に、人の目には見えないが世におられたことを示す。もし人が創造された世界、万物の秩序と支配に心を向けるならイエスを知ることができた。

11 この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった イスラエルの民は神に選ばれ、律法が与えられ、恵みの約束の内にあった。預言の成就として、ユダヤに救い主イエスは生まれた。イスラエルの民はイエスを信じることなく、拒み、十字架

に付けた。

12 この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々 「自発的、意志的にイエスを信じる者ならだれでも」という意味である。受け入れることは信じること、信じることは受け入れることである。

13 血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく 先祖にだれかを持つということではない。人間的な力でも、努力でもない。ただ神への信仰によって、新生の恵みに与るのである。

14 ことばは人となつて 神の言葉である方が、罪以外はすべてにおいて私たちと同様の人となった。神であり、人である唯一のお方である。住まわれた(ギ)スケノー) 本来、天幕を張るという意味である。他に黙示録で四個所用いられている。私たちはこの方の栄光を見た イエスは多くの奇跡をなさったが、特にヨハネが見た山上の変貌(へんぼう)をさすのであろう。恵みとまことに満ちておられた イエスは律法を越えた、恵みの福音という真理を表された。

参考図書 G. R. Beasley-Murray (WBC), Leon Morris (NICNT) 他

聖書

ヨハネ1・29〜37

タイトル

心をきれいにしてくださるイエス様

暗唱聖句

見よ、世の罪を取り除く神の子羊。

目標

ヨハネ1・29
神の子羊であるキリストを信じ、罪の赦しをいただく。

導入

(飯田勝彦)

今日から、アドベント第3週に入りました。この一週間もイエス様の誕生を待ち望みながら過ごしましょう。

さて、もし皆さんの大切にしている物に黒いペンキが付いたらどうしますか。もちろん一生懸命、きれいにするでしょう。服や靴などが汚れたら、洗濯をしてきれいにすることができます。でも、心はどうでしょうか。

私たちには罪がある

よく「あの人、性格悪いよね」とか反対に「あの人、本当に良い性格してるね」と言ったりしませんか。皆さんが、性格が悪いと思う人はどんな人でしょうか。親切ではなく、いつも人の悪口を言っている人、自分のこと

しか考えない人、だれかをいじめている人などが性格の悪い方に入るでしょう。皆さんは、「自分はよい性格で心は汚れていない」と思いますか？

皆さんの中で、今まで一度も嘘をついたことがない人、家族と喧嘩をしたことがない人、「あの人さえいなければ良いのに」と思ったことのない人がいるでしょうか。このような思いを「罪」と言います。罪は、大切な心を汚してしまいます。聖書は、「私たち人間は、罪に汚されている罪人だ」とはっきりと言っています。これに当てはまらない人はいません。

皆さんにとって心はとても大切な所でしょう。そこが罪によって汚れていて平気でいられますか。汚れていることが分かれば、きれいにしたいでしょう。でも、罪を認めないで自分の心は大丈夫だという人は、心がきれいになるどころか、罪の汚れが心の中に広がって行きます。私たちは罪に汚れた心を自分では、どうすることもできないのです。

神の子羊であるキリスト

私たち人間の罪が赦されるためには、血が必要でした。

血には命があります。ですから、人間の罪が赦されるために、誰かが血を流し、死ぬ必要があったのです。神様はイエス様が来られる前に、罪の汚れを取り除く方法をイスラエルの民に与えられました。それは、傷のない動物をいけにえとして神様にささげることでした。罪を犯した人は、動物の頭に手を置き、すべての罪をそれに負わせます。そして、祭司がその動物を殺した時、罪は赦されたのです。でも、本当は動物のいけにえでは、完全に罪を取り除くことはできなかったのです。ですから、神様はイスラエルの民にこのいけにえを通して、完全な救いをもたらす救い主を待ち望むようにされました。それが、救い主であるイエス様です。

動物は、私たち人間よりも劣るものです。ですから、私たち人間の罪が赦されるためには、罪がないきよい人間の血が神様にささげられる必要があります。でも、私たちは皆、罪があり汚れた者です。ですから、一度も罪を犯したことはない、きよいイエス様が私たちのかわりになつて罪をすべて負い、いけにえとなつてくださいました。

ある所に、自分の罪に悩んでいる警察官がいました。彼は聖書の話聞き、自分には罪があり、永遠の滅び

に行くばかりだと落ち込んでいました。ある時、夢を見ます。永遠の滅びの道を歩いていると、前から歩いて来る人がいます。「どこに行くのか」警察官、「はい、永遠の滅びに向かっています」、「あなたはそこに行かなくてもよい」、「えっ、どうしてですか」、「わたしが代わりに行ったから」。それはイエス様でした。

イエス様は、私たちのどうすることもできない罪を、すべて背負つて十字架で命を投げ出されたのです。このイエス様の十字架を信じるなら、イエス様が私たちの心にこびりついている罪を、すべてきれいに取り除いてくださいます。

まとめ

イエス様は、私たちの罪を取り除く子羊となるために、クリスマスにこの地上に來られました。

救い主であるイエス様を信じましょう。そして、心を汚すすべての罪を、イエス様によって赦して貰いきれいにして頂きましょう。

♪神のお子のイエスさま♪ (ホ74)

聖書 ヨハネ1・29〜37 テーマ 神の子羊なるキリスト

序論

(高橋頼男)

バプテスマのヨハネは、神に示されて自分が見聞きしたことを証しし、イエスがキリストであることを人々に紹介しました。彼の証しと、さらにその核心の言葉（見よ、世の罪を取り除く神の子羊）について学びます。

一、バプテスマのヨハネの証し（29〜34）

バプテスマのヨハネはこの時すでにイエスにバプテスマを授けていました。そして、このイエスについて示されていたこと、見聞きしていたことを証しました。

①この方は（私にまさる方です。私より先におられたからです）とは、イエスの先在性、永遠から永遠におられる神であることを証しています。

②（御霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを私は見ました：私を遣わした方が、私に言われました：）「聖霊が鳩のような形をして、イエスの上に降って来られた。すると、天から声がした。『あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。』」（ル

カ3・22）。御父とイエス様が一体であられることを明らかにし、父と御子の関連を証しました。

③ヨハネは神から語られていたイエスについての証しを見て、この方こそ（聖霊によってバプテスマを授ける者である）と証しました。

④そして、何よりも、このお方は（世の罪を取り除く神の子羊）であると証しています。

二、世の罪を取り除く神の子羊（29）

罪ある人間が聖なる神に近づくには、どうしてもいけにえが必要です（レビ1〜7章）。とりわけ罪のためのいけにえがささげられなければなりません。神が備えられた世の罪を取り除くいけにえは、「神の子羊」でした。昔、神殿において、罪の贖いのために子羊が連れてこられ、人々はその子羊に手を置いて罪の告白をしました。そうすると、人の犯した罪が子羊の上に転嫁され、祭司は子羊を殺しその血を祭壇に注ぎました。このようにして、罪のない子羊による身代わりの死を通して、人間の罪の赦しの祭儀が行われたのです（レビ4・32〜35）。しかし、そのような儀式によってでは人間の心はきよめられることができず、良心も休まることはなかったのです。

この旧約時代の祭儀は、やがて来られるイエス・キリストによる贖いのひな型でした（ヘブル9・11～14）。

「神の子羊」のモチーフはすでに旧約の中に出てきます。出エジプトにおいて、過ぎ越しの祭りがおこなわれ、子羊が殺されてその血が家のかまいに塗られました。その夜、さばきのみ使いは、その血を見て過ぎ越したのです（出エジプト12章）。イザヤ53章には、苦難のしもべが「屠^{ほふ}り場に引かれて行く羊」（7）として描かれています。これらはキリストのことです。ヨハネは、この十字架のイエスこそ、神の子羊キリストであることを言っているのです。イエス・キリストこそ人間の罪を贖いきよめるお方でした。このお方は、人間の罪を贖うために人となられ、罪を犯さない生涯を全うされ、十字架という祭壇の上に神の子羊としてご自身をささげられました。このキリストの血による贖いによって、初めて人間は罪の完全な贖いを受けることができたのです。バプテスマのヨハネはまさに、この方こそ永遠の神の子羊、人間の罪を贖うお方であることを指し示しました。

三、見よ（29）

かつて、モーセは荒野において神に命じられ、青銅の

蛇を造りました。その蛇は宿営の中で旗竿の上につけられて高く掲げられました。そして、罪を犯し毒蛇にかまれた者が、どこにいても直ちに竿に掲げられた蛇を仰いで見るなら、瞬時に毒が除かれ生きることができました（民数記21・4～9）。罪を犯した者はいつでもどこからでも「青銅の蛇を仰ぎ見ると生きた（9）のです」。

バプテスマのヨハネは「見よ！」と叫びました。私たちのために、すでに成し遂げられた神の贖いの御業を信じ受け取るという『信仰』を促しています。信仰によって罪の赦しは私たちのものとなるのです。どんな時にも、どんな状況の中にあっても、ただひたすら、繰り返し繰り返し十字架の主を仰ぐ者でありたいと思います。イエス様は、私たちの罪のために十字架にかかり、身代わりの贖いを成し遂げてくださいました。その十字架が、私の罪のためであると信じて十字架の主イエスを仰ぐ時、私たちの罪は直ちに赦され、きよめられ、生きるものとされるのです。

結論

今、神の子羊であるイエス・キリストを仰いで、信じて、罪の赦しを得ましょう。

研究資料

(中島啓一)

テキスト

29 その翌日 ユダヤ人たちが洗礼者ヨハネのもとに使用を遣わした日(19、28)の翌日。そのやりとりの中でヨハネは、自分はキリストではないこと、そしてキリストは自分のあとに來られることを言明している。自分の方にイエスが來られるのを見て ヨハネ福音書はイエスがバプテスマを受ける実際の場面を描いておらず、ここにイエスは、すでにヨハネからバプテスマを受けた者として登場する。ヨハネは、群衆に対してイエスを、その使命を端的に表す表現によって紹介するのである。世の罪を取り除く神の子羊 黙示録5・6以下には、「屠^{ほふ}られて、すべての部族、言語、民族、国民^{あがな}の中から、(その)血によって人々を神のために贖^{あがな}」った「子羊」が登場する。このようにキリストを指し示す表現として子羊を用いるのは、新約ではヨハネ福音書と黙示録の、二つのヨハネ文書だけである。旧約に目を移すと、洗礼者ヨハネがたぶん念頭に置いていたであろう個所がいくつかある。一つは「神ご自身が、全焼のささげ物の羊を備えて

くださるのだ」(創世記22・8)というアブラハムがイサクをささげる場面。二つ目は出エジプトにおける過ぎ越しの子羊(出エジプト12章)である。これら二つにおける子羊は、厳密に言うとな罪のための犠牲ではないのだが、前者ではイサクに代わる犠牲として(ただし実際は雄羊)、後者では罪の力からの解放を象徴するものとして捉えることができるだろう。三つ目の個所はイザヤ53章である。ここでは、キリストを指し示す苦難のしもべが、「屠り場に引かれて行く羊」(7)として「自分のいのちを／代償のささげ物とする」(10)とあり、罪のための犠牲というポイントがはつきりと示されている。このように「神の子羊」のモチーフは、苦難のしもべのイメージを中心としつつ、複合的な背景を持つものと考えて良いだろう。そのイザヤ53章では、「毛を刈る者の前で黙っている雌羊」(7)とあるように、苦難のしもべの従順さが強調されている。イエスは、まさに従順なしもべとして、ヨハネからバプテスマをお受けになった(マタイ3・15)。罪なきお方であるから、もちろん自分の罪のためではない。贖罪の死という使命を、強いられてではなく自発的に受け入れたことのあかしとして、イエスはバプ

テスマをお受けになったのである。

30 私より先におられたからです 27節でもヨハネはイエスの圧倒的優位を告白しているが、ここで一つの理由を示している。「後に来られる方」(27)であるのに、「先におられた」と言うことは、「初めにことばがあった」(1)というイエスの先在性を暗示するものであり、それが「神の子」(34)告白につながっていくのである。

31 私自身もこの方を知りませんでした 神からの約束のしるし(33)を見るまでは、ヨハネも誰がキリストであるか知らなかった。この方がイスラエルに明らかにされるため 彼が神から与えられた使命は、まさにイエスの公生涯のためのカーテンを開くことであった。

32 御霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを私は見ました イザヤの預言「その上に【主】の霊がとどまる」(11・2)、「わたしは彼の上にわたしの霊を授け」(42・1)の成就であると共に、ヨハネに示されていたしるし(33)の実現であった。彼はそれを見てイエスこそキリストだと確信したのである(34)。

33 聖霊によってバプテスマを授ける者 エゼキエルは、神が民を「きよい水」(36・25)できよめるだけではない、民に「新しい霊」(同26)をお授けになると語る。前者がヨハネの水のバプテスマであるなら、イエスこそが後者によって救いを完成されるお方なのである。

34 神の子 バプテスマを受けたイエスに「わたしの愛する子」(マルコ1・11)との天の声があったと、他の三福音書は記す。ヨハネ福音書ではその場面の代わりに、洗礼者ヨハネが、30節での先在性の証言と合わせて、イエスと御父との永遠の関係を証言していると言えよう。

35 二人の弟子 一人はアンデレ(40)。もう一人の名は記されていないが、この福音書を記したいいわゆる愛弟子(13・23他、おそらくヨハネ)との説が主流である。

36 見よ、神の子羊 前日の証言(29)の要約だが、驚くべきことは、この言葉の中に「私ではなく」イエスに従え」との意図が、おそらく含まれていたであろうことである。弟子を他の教師に譲ることは当時の社会では考えられないことであり、ここにイエスの前でのヨハネの徹底した謙遜が表されている(3・30参照)。

参考図書 注解書 G. R. Beasley-Murray (Word), F. F. Bruce (Eerdmans), B. Lindars (New Century Bible), 他 The IVP Bible Background Commentary: NT.

聖書

ヨハネ2・11

タイトル

カナの結婚式

暗唱聖句

イエスはこれを最初のしるしとしてガラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。
ヨハネ2・11

目標

キリストによる変革を体験する者となる。

導入

(今田雅子)

アドベント第4週に入りましたね。

さて、皆さんは「はらぺこあおむし」という絵本を知っていますか？ 小さい青虫がだんだん大きくなって、最後は蝶になるというお話です。青虫の時は飛べないけれど蝶になったらひらひら飛ぶ、凄く変わりますよね。全てを造られた神様って凄いです。

今日はイエス様が、水をぶどう酒に変えられた奇跡のお話です。

水をぶどう酒に変えたイエス様

イエス様と弟子たちはガラヤのカナという町での結婚式に招待されました。イエス様の頃のイスラエルでは

結婚式とその後のパーティーが1週間くらい行われたそうです。へえ、凄いね。パーティーだったらご馳走が出たのかな？ 1週間もご馳走か。いいな、って思いませんか？ でも、準備をする人たちは大変だったでしょうね。ところがその結婚式のパーティーで大変なことが起こりました。ぶどう酒が無くなったのです。当時、結婚式に、ぶどう酒はとても大切でした。ぶどう酒が無くなったら、結婚式に来た人たちに大変失礼になるのです。さあ、この大ピンチどうなるのでしょうか！

イエス様のお母さんマリアが、イエス様ならなんとかしてくれると思って「ぶどう酒がありません」とイエス様に言いました。でも、イエス様は「わたしの時はまだ来ていません」と答えられました。ところが、マリアはイエス様の答えにがっかりなんてしません。給仕の者たちに「あの方が言われることは、何でもしてください」と言ったのです。するとイエス様は空っぽの水がめ六つに「水がめを水でいっぱいにしなさい」と給仕の者たちに言われました。この水がめは、子どもが中に入れるくらい凄く大きなものでした。給仕の者たちは「えー、こんなに大きな水がめに水を一杯入れてどうなる？」と思っ

たかもしれません。でも、そんな文句は言わないで、イエス様の言われる通りにしました。するとイエス様は「それを汲んで、宴会の世話役のところに持って行きなさい」と言われたのです。結婚式のパーティーにいるのは、何だったかな？ 水ではなくってぶどう酒だったよね。給仕の者たちは、宴会の世話役のところにその水を汲んで持って行きました。すると、何とそれは凄く良いぶどう酒にぜいぐんぶ変わっていたのです。宴会の世話役はとても喜んで、花婿を呼んで褒めました。

私たちを変えてくださるイエス様

弟子たちは、今までイエス様と一緒に生活して、イエス様こそ神の子羊だと知っていたのです。けれども、この奇跡を見た後、彼らはイエス様を信じる者に変えられました。でも、イエス様は奇跡を行うただけにこの世に來られたのでしょうか？ いいえ、そうではありません。それは、私たちがイエス様を信じる者へと変えるために來られたのです。イエス様を信じる時、私たちは罪人から救われた者に変えられ、不安や恐れの中から、喜びと感謝の心に変えられます。また、神様を愛し、人を愛するように変えられるのです。

M子さんが若い時、仲良しの友だちが病気で死んでしまいました。その時にM子さんは、自分が死ぬことを考えると、怖くて恐ろしくなったのです。暫くして、教会に導かれ、イエス様を信じて救われました。それから、死が怖くて恐ろしいものではなくなりました。そして、罪を赦された大きな喜びと、いつも一緒におられるイエス様から平安を頂きながら歩む者に変えられたのです。

皆さんは、心が悲しかったり苦しかったりすること、あるよね。イエス様は、皆さんがずっとそんな気持ちで歩むことを願っておられません。喜び一杯の心で歩むことが出来るように「変えたい」と願っておられるのです。

イエス様は、あなたを心の底から変えてくださるお方、変えることの出来るお方です。もう、イエス様に変えてもらいましたか？ 「まだだなあ」と思う人は是非、「イエス様、わたしの心を変えられるのはあなただけで。どうぞわたしを変えてください」と祈りましょう。水をぶどう酒に変えるほどの奇跡を行う素晴らしいイエス様は、絶対にあなたを、そして、あなたの心を変えてくださいます。

♪新しい歌で♪ (PW 50)

聖書 ヨハネ2・1～11 テーマ カナの結婚式

序論

(高橋頼男)

水がぶどう酒になるという変化は、自然界のそれなりの過程と熟成期間を経て可能だということは理解できます。しかし、それらを全部省いて一瞬で水がぶどう酒に変わるというのは、奇跡としか言いようがありません。主イエスは、ガリラヤのカナにおける結婚式に招かれ、その宴において最初の奇跡（しるし）を行われました。

一、ぶどう酒がなくなる(1～3)

イエスラエルの結婚の宴は一週間も続いたようです。人々にとってこれは特別な楽しみの時で、その間、大いに喜び楽しみました。そして、その喜びと楽しみの中心にぶどう酒がありました。しかし宴席の真つただ中でそのぶどう酒が尽きてしまったのです。理由は、イエスの弟子たちが大勢で押しかけたからとも推測されます(参照・研究資料)。とにかく、イエスも弟子たちも祝宴に参加し、婚礼の喜びと楽しみを共にしたのです。

主催者側としては、集まってくれた客に対して大変な

失態です。せっかくの喜びの席が台無しになりかねない事態です。しかし、その宴席にイエスがおられたということは、本当に大切なことでした。

二、マリアの信頼、給仕の者たちの忠実(3～8)

この結婚式で母マリアは主催者としての何らかの責任ある立場を持っていたようです。つまり婚礼の祝いの席を守る立場にありました。そこで、彼女はこの窮状をすぐさまイエスに訴えました。イエスが必ず何かをしてくれることを信じていたからです。これまでもこのようなことが何度もあったのでしょうか。母のイエスに対するゆるぎない信頼がありました。

①イエスにありのままを訴える

ああしてください、こうしてください、なんとかしてください、というのではなく、マリアは現在の窮状のありのままを、簡潔にイエスに告げました。全幅の信頼があったからです。しかも、イエスがなされることかどのようなことであつても必ず最善をなされるという信頼です。イエスの返事は、拒絶というのではないとしても、決して良い返事ではありませんでした。しかし、マリアの一貫した信頼に変わりはありません。

② 給仕の者たちに備えを言いつける

マリアの信頼は、給仕の者たちにイエスの言われることは何でもするようにと言いつけるところにも表われました。困難や危機の中で為すすべなく無為に過ごしたり、また怠惰であつてはなりません。主に信頼し、期待し、今なすべきことをしっかりと成し遂げることが大切です。

③ 給仕の者たちの忠実な働き

給仕の者たちは、マリアに言われたように、また、イエスが命じられたように、誠実かつ忠実に、すべての水がめにふちまで水をいっぱい入れました。もし、こんなことに何の意味があるかと問い、不信を持つなら、このようなことは決して出来ません。行つたとしても適当なところで役割を済ませたことでしょう。彼らは給仕の者としての立場に徹して、言われたとおり忠実に働きました。そして、彼らにもまた、自分たちの理解を超えてイエスがなされることへの期待があつたのではないでしょう。その期待は見事に答えられたのです。〈汲んだ給仕の者たちはそれがどこから来たのかを知っていた〉。奇跡を行われたのはイエスですが、その業に参加したマリアの信頼と給仕の者たちの従順がありました。

三、水がぶどう酒に変わるとは(11)

給仕の者たちが汲み、持っていった水は、変化して良いぶどう酒となりました。ぶどう酒を味見した世話役は、その素晴らしい味わいに驚いて花婿を呼んで褒めました。このようにイエスはマリアの訴えに応えて水をぶどう酒に変え、婚礼の危機を助けられました。確かにそれが奇跡の直接の目的でした。しかし、この奇跡にはそれ以上の意味がありました。〈それで、弟子たちはイエスを信じた〉。この奇跡の本当の意味と目的は、この奇跡を通して神の栄光が現され、弟子たちがイエスを神の子、救い主と信じるためです。イエス・キリストは人間の罪を赦し、死から命へと救うことのできる神であり、救い主であるということに分からせるためでした。人間の魂の救いほど大きな変化をもたらす奇跡はありません。彼らはイエスをキリストと信じ告白する者と変えられていくのです。

結論

危機の中で、キリストは私たちの状況を変え、私たちを変革してください。それは、素晴らしい経験です。わたしたちは、主イエスに全く信頼し、キリストの変革をいただきましょう。

研究資料

(中島啓一)

テキスト

1 それから三日目に ナタナエルの召命から二日後(二日目も数に入れる)。この「三日目」が十字架と復活による栄光を予感させているという説、1・19から数えて七日間となる(1・39でも日付が変わる)ことから、天地創造に比しての「新創造」が提示されているという説もあるが、実際そういう意図があるかどうかは不明。ただしヨハネが受難に多くのページを割いていること、また新創造が主要テーマの一つであること(3・3、20・22等)は確かである。ガリラヤのカナ ナザレの北北東6 kmのケフル・ケンナ(記念する教会が二つある)、あるいはナザレの北14 kmのキルベト・カーナ(現在は廃墟)。いずれも、婚礼の主人とイエスの家族との親しい関係を説明できる距離。婚礼 ユダヤの結婚式は多くの客を招いて七日間も行われた。

2 イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれていた 母マリアが接待役を務めていたことと合わせ、家族ぐるみの交わりがあったと推測される。大勢の弟子たちが一緒

に出席したことも、ぶどう酒の欠乏の一因かもしれない。

3 ぶどう酒がなくなると 来客は相応の祝儀を持参することが通例であったので、ぶどう酒が無くなることは、主人の社会的評判を落とすことにつながった。母はイエスに言った 困ったときはこのようにイエスを頼りにしてきたのであろう。この時も窮状をありのまま伝えた。

4 女の方 通常は母親に対して用いない、丁寧だが距離を置く呼びかけ。決して無礼な表現ではない。イエスの助けを必要とする者は、たとえ母であっても、母と子の関係に基づいてそれを求めるべきでないことを示す。あなたはわたしと何の関係がありますか 聖霊を受け、

御父から遣わされた使命を果たすための力をお受けになったイエスにとっては、父の御心に従うことが、何にも優先されるのである。わたしの時はまだ来ていません ヨハネ福音書において「時」(ギリシア語)は、十字架と復活による栄光の時を指し示す。その時はやがて来る(17・1)のだが、今はまだ来ていないのである(7・30、8・20)。

5 母は給仕の者たちに言った… マリアは、イエスの一見不親切に思える答えの中にも、その真意のかけらを

汲み取った。イエスに託すならば問題は解決するに違いないと信じるマリヤの強い信仰を見ることができると。

6 ユダヤ人のきよめのしきたりによって この「水」は手を洗う、器をきよめるといった宗教的儀式のために用意されたものであり、旧約の律法を象徴している。イエスはそれを、よりよいものに置き換えてくださる。石の水がめ 陶器などと違い、石のかめは宗教的な汚れを受けることがないので、一般によく用いられた。六つ完全数に一つ足りない数字で、律法主義の不完全さを象徴していると解釈する注解者もいる。

7 彼らは水がめを縁までいっぱいにした 彼らはマリヤに言われたとおりに、イエスの指示に完全に従った。

8 宴会の世話役 料理や酒についての責任者。

9 ぶどう酒になっていたその水 水をぶどう酒に変えたイエスは、律法を「廃棄するためではなく成就するために」(マタイ5・17) 来られた。この方にあつて古い律法に代わり「御霊と真理」(4・24) による新しい礼拝が始まる。

10 初めに良いぶどう酒を出して… 人々の感覚が鈍くなつていくにつれて、そうすることは世の常である。し

かし神の恵みはそうではない。末広りの恵みである。

11 しるし 単なる奇跡ではなく、その背後にある霊的な意味を悟らせるもの。この福音書に記されている7つのしるしのうちの最初のものである(他に4・46、54、5・1、9、6・1、14、16、21、9・1、12、11・1、44)。ご自分の栄光を現された 「私たちはこの方の栄光を見た」(1・14)。受肉されたことばであるお方が、その創造の力をあらわされた。「神の国」はしばしば祝宴にたとえられ(マタイ8・11他)、ぶどう酒はそれを特徴づけるものである(イザヤ25・6)。カナの婚宴においてあらわされたイエスの栄光は、御子こそが神の国の恵みを世にもたらすお方であることを示している。モーセの最初のしるしは水を血に変えることであつた(出エジプト7・20)。それに対し、イエスが水をぶどう酒に変えられたことは、イエスが、古い律法の受領者をはるかにしのぐ、新しい命の授与者であることを力強く示している。弟子たちはイエスを信じた 十字架と復活の栄光へとつながっていくこれらのしるしを通して、弟子たちの信仰は強められていく。

参考図書 12月11日分と同じ。

聖書

ヨハネ3・16〜21

タイトル

最高のプレゼント

暗唱聖句

神は、実に、そのひとり子をお与えになつたほどに世を愛された。ヨハネ3・16

目標

神の御子イエス・キリストを救い主と信じ、永遠の命を得る。

導入

(後藤 真)

今日はクリスマスです。クリスマスはケーキを食べたりツリーを飾ったり、プレゼントをもらったりする日だと思っている人いませんか？ クリスマスというのは、キリストとミサ（礼拝）が合わさったことばで、キリストを礼拝するという意味です。クリスマスのお楽しみもいろいろ気になるかもしれませんが、まず聖書のことばを聞き、イエス様を礼拝することに心を向けましょう。

イエス様の降誕

今から二千年くらい前のことです。イスラエルにあるベツレヘムという小さな村で赤ちゃんが生まれました。この赤ちゃんがイエス様です。天使はイエス様のお母さ

んになるマリアに、生まれる子どもが世界を永遠に治める王様になることを教えました。また天使は、イエス様を育てるお父さんになったヨセフには、生まれる赤ちゃんが、世界の人たちを罪から救うこと、いっしょにいてくださる神様であることを教えました。

でも、イエス様が王様であり、神様であり、罪から人々を救う方だということは、聖書を教える学者たちも、神殿で礼拝のご用をする祭司たちも、イスラエルを治めていたヘロデ王も知りませんでした。小さな村で生まれた赤ちゃんのことなんてだれも気にしていなかったのです。

世界で最初のクリスマス

夜通し羊の番をしていた羊飼いたちが、イエス様の礼拝、クリスマスの第一号になりました。天使が、羊飼いたちに救い主がお生まれになったことを教え、羊飼いたちはイエス様のところにつけたのです。

次にイエス様を礼拝したのは、東の国からやってきた博士たちでした。イエス様が生まれてからしばらくたったころ、星を調べていた博士たちはイスラエルに新しい

王様が生まれたことを知りました。それで博士たちはイエス様に贈り物を持ってやってきたのです。

このときはじめてヘロデ王は新しい王様が生まれることを知りました。あわてて聖書を調べた学者たちも、それが旧約聖書に書いてあることだと気づいたのです。王様の位を狙われることを怖がったヘロデは、ベツレヘムの近くで生まれた二歳より小さい男の子を皆殺しにする命令を出しました。イエス様はギリギリのところ、エジプトに逃げて助かります。

神様の思い

イエス様は王様として生まれたのに、家畜のえさを入れる飼葉桶に寝かされました。イエス様は神様なのに、礼拝に来たのは羊飼いと外国の博士たちだけでした。イエス様が救い主だとみんな分からなかったのです。エルサレムの人たち中には、喜びやうれしさよりも、心配やおそれが広がりました。

神様もまたつらく苦しい思いでイエス様をマリアのところから生まれさせました。なぜなら、神様はイエス様を十字架にかけるつもりだったからです。生まれたばかりの赤ちゃんには将来の希望があります。でも、イエス様の将来は十字架と決まっていたのです。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」というきょうの聖書のことばは、そんな神様の思いが詰まったことばです。

神様はこの世界を愛しています。イエス様を信じて、イエス様といっしょに生きる人たちに永遠のいのちを与えたいと願っています。だれも滅びてほしくないと思っています。だから、つらく苦しい思いをしても、イエス様を、十字架にかけるためにマリアのところから生まれさせてくださったのです。

イエス様は、神様からのプレゼントです。それはどんな豪華なクリスマスプレゼントよりもっとすごい、永遠のいのちにつながる最高のプレゼントです。このイエス様を信じ、イエス様といっしょに生きる決心をして、永遠のいのちをみんなで受け取りましょう。

♪もろびとこぞりて♪（コ28、イン24、ホ30他）

聖書 ヨハネ3・16～21 テーマ 最高のプレゼント

序論

(福井文彦)

今日の聖書箇所は、福音書の要約であり、聖書の真理がこれに集約されています。ここに聖書の中の聖書と呼ばれる16節が含まれています。その16節を要約すれば、「救い主キリストを神からのプレゼントとして信じ受け入れるなら、永遠の命を得ることができる」との約束なのです。

一、神は、世を愛された

〈神は…世を愛された〉と、神の愛の対象は〈世〉です。〈世〉とは神の選民イスラエルだけでなく、時代も民族も越えた全人類のことです。その〈世〉は神に愛されるだけの価値があったのでしょうか。まったくありませんでした。なぜなら、神を知らず、いやむしろ神を否定し、無視し、背を向け、信じていない世界が〈世〉だからです。神を否定し、信じていない人間は、神の代わりに、被造物を神と崇める者となり、それが自己中心性となって表れるのです。

その結果、具体的な罪を犯す者となりました(マルコ7・20～23、ローマ1・28～32)。人は罪を犯すから罪人ではなく、生まれながらの罪人であるから罪を犯すのです。ですから、〈世〉は「罪の世」であり、「汚れた世」です。そのこの〈世〉を、それにもかかわらず、神は愛してくださったのです。ここに無条件の愛を見ます。人間の愛は「もし…ならば」の条件付きの愛です。しかし、神の愛は、「にもかかわらず」の、無条件で絶対的な愛です。ですから、この神の愛の対象から漏れる人は一人もいません。

二、ひとり子をお与えになったほどに

神は無条件の絶対的な愛で〈世〉を愛されたのです。それは人が神から離れていても、神に敵対する者であっても、変わることなく愛する愛です。さらに驚くべきことは、〈神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに〉愛してくださったのです。この「与える」という言葉は、殿様が家来にご褒美を与えるような意味にとられますが、これは実は「お捨てになった」ということなのです。それは、「与える」のギリシャ語「デイドーミ」には、「明け渡す」という意味があるからです。つまり、「神

はひとり子をお捨てになったほどにこの世を愛して下さった」ということなのです。神は愛の対象、喜びの源であるひとり子イエスを犠牲にしてまで、〈世〉を愛されたのです。

そのイエスが、「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません」(14)と語られました。これは、明らかに十字架のことを意味しています。ですから、神がひとり子をお捨てになった犠牲とは、イエス・キリストの十字架のことです。神は、一つの罪も少しの汚れもないお方、捨てられる理由の全くないひとり子を十字架におかけになるほどに、この世を愛されたのです。

三、御子を信じる

神はなぜ、それほどまでのことをされたのでしょうか。ひとり子を十字架にかけるほど、世、すなわち私たちを愛してくださった、その愛は私たちに何をもたらしたのでしょうか。それは、

① 永遠の滅びからの救いです。永遠の滅びとは、永遠の刑罰です。その世界は神との交わりのない世界、愛の温度の一度もない、慰めのかけらもない世界、一筋の光

さえない暗黒の世界、それが永遠の滅びです。この永遠の滅びは、確実に、すべての人に来ます。しかし、イエス・キリストの十字架の救いは、この滅びから私たちを救います。

② 永遠の命への救いです。永遠の命とは、ただ単に寿命がいつまでも続くというわけではありません。死に打ち勝つ命であり、全く質の違う、永遠に神のもとにあり続ける人生に導き入れてくれる命です。それは、イエス・キリストの復活と同じ復活にあずかることです。

その命を得て自分のものとするために必要なことは、悔い改めと信仰です。①心の罪、言葉の罪、行いのあやまちでも、正直に認めて神に告白することです(イヨハネ1・9)。②もう一つは、キリストが自分に代わって死んでくださったことを信じることです(ローマ10・9)。

結論

神の愛のゆえに、キリストによって世界のすべての人々に救いの扉が開かれています。すなわち、救いは世界のすべての人々のために備えられています。それゆえこの世の中のどんな人でも、キリストを信じ受け入れるなら救われるのです。

研究資料

(井上義実)

聖書の最高峰、聖書の中の聖書と呼ばれるヨハネ3・16を含む文節である。イエスがニコデモに語られた直後に記されている。イエスが語った言葉の続きなのか、ヨハネの説明なのか問われる。イエスとニコデモとの会話を受けて、ヨハネが救いについて記したと考えることが妥当であろう。

テキスト

16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された **ひとり子** (ギ)モノゲネース) 形容詞であり、単数形の息子 (ギ)フィオス) と共に一人という唯一性が、強調されて用いられている。英訳聖書 (NIV) では、ワン・アンド・オンリー・サン (一人にして唯一の息子) と訳している。イエスが賜物として、この世に与えられたのは、神の愛の結果である。神の愛は、人が神から離れていても、敵であったとしても変わらなく愛される愛である (ローマ5・6・8参照)。神の側から、一方的な愛としてイエスを送られた (Iヨハネ4・10参照)。**世** (ギ)コスモス) 新約聖書中186回用いられている。

ヨハネ福音書に78回、ヨハネの手紙に24回、ヨハネの黙示録に3回、ヨハネは計105回この語を用いている。ヨハネはこの世についての詳細な考察を行なっている。この個所で、この世とは、時代も民族も越えた全人類を指している。神の愛に与れない人は一人もないということである。神に反する忌むべきこの世ではなく、神の慈しみによって救われるべきこの世である。**御子を信じる者** 「信じる」 (ギ)ピステウオー) は現在分詞能動態で記されている。イエスへの信仰は現在のみならず将来も信じ続けることである。人が持つ自発的、能動的、意思的な信仰であることが解る。**滅びることなく** 「滅び(る)」 (ギ)アポリューミ) とは永遠の滅亡を指している。永遠の命との対比で記されていることが多い。この文脈で強調されるのは、永遠の滅びではなく、永遠の救いである。**永遠のいのち** ヨハネ福音書の主題である。イエスによる救いにあるものは信仰によって現在すでに、死から命に移されている (5・24参照)。イエスによって与えられる神の命は、信じた時点より始まり、永遠に及ぶものがある。

17 **世に遣わされた** 「遣わ(す)」 (ギ)アポステロー)

ヨハネ福音書では、イエスが神から遣わされたと記す箇所が38箇所ある。イエスの使命が神からのものであることが示される。他の福音書に比べて特徴的である。世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。「さばく」(ギリクリノ)と訳された語は、広い意味を持つ言葉であるが、終末に不義に定めるという意味も持つ。ユダヤ的思想ではメシアは義をもつてさばくために来臨するという考えがあった。イエスがこの世に降誕したのは、人をさばき、滅びに定めるためではない。16節では永遠の滅びではなく、永遠の命を持つために救いを備えられたことが語られている。本節ではイエスが人をさばくのではなく、人を救い、永遠の命に生かすために来られたことが記されている。しかし、再び来られる再臨のイエスには、義とさばきという面が強く表される。

18 御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれている イエスを通して神を信じることで、信じないこととの差異は非常に大きい。信じる者はさばかれず、信じない者はさばかれる。そのさばきはすでになされていることが示されている。さばかれない イエ

スを信じる者はさばかれない。信仰によって義とされた義認の結果である。義認は十字架でなされたイエスのあがないを信じることに始まる。神は完全な罪の赦しゆるを与えてくださり、罪の刑罰から解放してくださる。信じる者を義であると宣言され、新しい神からの命に生かしてください。さばきにおいては「さばかれない」のであるが、同時に積極的な生に導かれる。さばかれている(ギリクリノ) 完了形受動態で記されている。すでにさばきを受けており、なおさばきは継続している。イエスを信じないという決断と意思は、その人が生きている死んでいるという状態に関わらず、さばきに置かれ続けるのである。イエスを信じない者は生きていても、滅びの淵にあるのである。神のひとり子ひとりごの名 「名」(ギリオノマ) 十戒にある神の名をみだりにとなえてはならないとの戒めから、ユダヤ人は神の名を大切にした。ユダヤ思想では、名は単に区別のためにあるのではない。名は人格、力を宿すものとして受け止められた。イエスの御名は、イエスの性質、イエスの力を持つのである。イエスの名を信じることは、イエスのすべてを信じることである。

参考図書 12月4日分と同じ。

牧羊ひろば



台湾基督長老教会台中健行教会 教会学校

いつも台湾宣教のためにお祈りとお支援を感謝いたします。私たちは二〇一八年八月より、台湾で活動を行っています。今回は教会学校、青少年伝道を中心に報告をさせていただきます。始めに台湾の教会における全体的な教会学校、生徒たちの現状について、次に著者（伊藤）が働きに携わっている台中建行長老教会の幼小科と学生科の働きを報告いたします。現在新型コロナウイルスの影響により、活動が流動的になっているため、この一年間、二〇二一年春頃から現在の活動報告が中心になります。

●台湾の教会学校

著者（伊藤）個人が見て来た範囲での報告になります。が、台湾の教会の特徴の一つはとて「教育的」であるということ。学生科ではメンバーたちに毎日のデ

ボーションを推奨しています。またクリスマスなどの大きな集会の前には、伝道へのチャレンジのため、それぞれが教会に誘いたい友達の名前を挙げてみんなで祈っています。また、日本のMEBIGや台湾の青少年伝道に関する組織の研修会も台湾各地、もしくはオンラインでもたれていて、教師たちの研修意欲の高さを感じます。

二つ目は「活動的」であるということです。台湾の学校教育が学力重視型であることから、いくつかの教会では家庭の事情などで塾に行けない家庭の子どもたちのために、学習支援を行っています。

三つめは「生徒たちの奉仕への積極的な参加」です。中高生が主日礼拝の賛美メンバーに加わったり、幼小科の生徒がCSの奏楽、会計の手伝いなどをしています。（以上の点は「特徴」であり、必ずしもそれが良いという意味ではありません。）

台湾の学校教育、もしくは台湾社会全体の価値観は、学力、学歴重視であると感じています。多くの学生は、小学校から高校まで塾に通っています。日本の場合中学に入ってから部活動が一つの大きな障壁となりますが、台湾の場合は塾が障壁となります。また、日本以上

の少子高齢化社会によって、教会の中も子どもたちの比率が少なくなっています。そのような中で、日本の教会と同様に子どもたちは中学、高校と進学、進級するにつれて、教会から離れて行くという課題があります。

● 幼小科（児童主日学）

台中健行長老教会では、教会学校幼小科は「児童主日学」と言われ、日曜日の午前中に礼拝を行っています。プログラムは、ゲーム、賛美、献金、メッセージの順です。メッセージは教案に基づき、パワーポイントを使い、ゲームなども取り入れながら、全部で40～50分ほどになります。

昨年の5～8月にかけて、新型コロナウイルス



礼拝 幼小科

の影響により、教会に集まっていたのあらゆる集会が禁止されたことから、毎週土曜日の午後、オンラインで30～40分程度の集会を始めました。活動には様々な制限はありましたが、学校もすべて休校、外出もしにくい状況の中で、子どもたちにとってよい時間となったと思います。感謝な事に、普段教会学校から遠ざかっていた子どもたちも、オンラインになってから参加してくれるようになりました。

毎年7、8月は台湾の学校は二か月間の長い夏休みになります。この時期は、各地の塾や習い事教室で子どもたちを集めてのキャンプやイベントが行われます。多くの教会でも「夏令営」と言われる夏季キャンプが毎年行われています。日本のキャンプとの違い宿泊



2019年夏期キャンプ

がなく日帰りで3日ほど行います。私たちの教会でも、例年通り計画をしていましたが、新型コロナウイルスの影響で昨年は中止となりました。今年はぜひ、行えることを願っています。

昨年12月に「小幸福親子聖誕Party」と題しクリスマス会が開かれました。日曜日の礼拝の時間に、礼拝

の他、アップルパイ作り、ゲーム、プレゼント交換などを行いました。子ども達自ら、数か月前から誘いたい自分の友達の名前を挙げ祈り、クリスマス会のチケットを手渡しました。彼らにとって尊い経験となったと思います。また、前日の会場づくりや当日の受付、ゲーム、プレゼント抽選などの手伝いにも加わり、ただ参加するだけではな



クリスマス会 幼小科

く、子どもたち自身も祈って、準備したクリスマス会でした。当日、一人の子どもは自分が誘ったお友達が来る信じて、ずっと玄関で待っていました（結局来ませんでした）。教会員のお孫さんや求道中の方々の子ども達、友人、知人の子どもたちとその家族の方々が参加してくれました。

●学生科（学青家族）

台中健行教会では、「学青家族」という名で中学生から大学生までのスモールグループでの活動を行っています。時間は主に土曜日の夕方と日曜日の礼拝後です。

土曜日の夕方の集会は、まずメンバー全員での祈りで始まります。現在は特に、新型コロナウイルスからの守り、弱さの中にある方々、新しいメンバーが加えられるように祈っています。その後は聖書の学び、人間関係についての学び、料理、など毎回違った内容で行われます。また時には皆で、外にピクニックに行ったりバドミントンやボーリングなどの運動をすることもあります。日曜日の礼拝後には、その週のデボーションからの分かち合いと祈りの時をもっています。

昨年の12月には「学青小組聖誕Party」と題しクリスマス会を行いました。メッセージ、賛美、証、ゲームなどの他に、普段より豪華な食事を用意しました。メンバーたちは、数週間前から参加者のリストを作り、名前を挙げながら祈り、入念な準備やリハーサルを行いました。また、多くの教会の兄弟姉妹も手伝いに加わりました。当日は、メンバーの友人や教師の知人の学生、など多くの参加者が与えられました。感謝。

台湾の学生はテストや宿題が多く、特に進学の時期になるとプレッシャーが大きいと感じます。また、近年は新型コロナウイルスの影響もあり、しばらく教会を離れているメンバーもいます。幼小科、学生科共に、現在のメンバーは多くはありませんが、教師たち



学生科



ピクニック 学生科

と共に、祈りながら、多くの時間や労力を割き、奉仕する姿に私自身もとても感動しました。続けて台湾宣教のために祈り下されば幸いです。

(伊藤 初)

光の子として生きる

マテウス 5:8

●教会の歩み

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

10月2日

キリストの名
による歩み

使徒 3:1 ~ 10

同 6 節

9日

アナニアと
サツピラ

使徒 5:1 ~ 11

同 11 節

16日

ステパノの
殉教

使徒 7:54 ~ 60

同 56 節

23日

サウロの回心

使徒 9:1 ~ 19

同 3 節

30日

マケドニアか
らの叫び

使徒 16:6 ~ 10

同 9 節

11月6日

看守と家族の
救い

使徒 16:25 ~ 34

同 31 節

●王たち

11月13日

ソロモンの知恵

I 列王 3:16 ~ 28

同 28 節

20日

王国の分裂

I 列王 12:1 ~ 19

箴言 12:15 節

27日

アドベント
・収穫感謝

ヒゼキヤ

II 歴代 32:9 ~ 22

同 7 節

●クリスマス・年末

12月4日

すべての人を
照らす光

ヨハネ 1:9 ~ 14, 5

同 9 節

11日

神の子羊なる
キリスト

ヨハネ 1:29 ~ 37

同 29 節

18日

カナの結婚式

ヨハネ 2:1 ~ 11

同 11 節

25日

クリスマス
・年末感謝

最高のプレゼ

ヨハネ 3:16 ~ 21

同 16 節

おわりに

『牧羊者』二〇二二年度Ⅲ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご芳に感謝いたします。

巻頭言は神田川キリスト教会の二宮一朗師が執筆してくださいました。教師養成講座は二〇〇七年度Ⅱ巻に掲載された鎌野直人師の原稿を一部編集して再掲させていただきます。「牧羊ひろば」では台湾宣教師の伊藤初師より台湾基督長老教会台中健行教会のCSを紹介していただきます。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1～3年生向け)、C(主に小学生4～6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<https://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

メッセージ例	聖書講解	研究資料	ワーク(A)	ワーク(B)	ワーク(C)	中高科へのヒント	子ども聖書日課	フラッシュカード	み言葉カード・イラスト	ワープロ打ち込み	校	正
和田牧子師	後藤真師	井上義実師	吉田美穂師	石川剛士師	竹崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
今田雅子師	飯田勝彦師	宮澤清志師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
石田高保師	小泉創師	鎌野善三師	吉田美穂師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
福井文彦師	宮澤清志師	小平徳行師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
宮澤清志師	高橋頼男師	石田高保師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
研究資料	鎌野直人師	伊藤初師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
ワーク(A)	鎌野直人師	伊藤初師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
ワーク(B)	鎌野直人師	伊藤初師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
ワーク(C)	鎌野直人師	伊藤初師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
中高科へのヒント	鎌野直人師	伊藤初師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
子ども聖書日課	鎌野直人師	伊藤初師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
フラッシュカード	鎌野直人師	伊藤初師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
み言葉カード・イラスト	鎌野直人師	伊藤初師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
ワープロ打ち込み	鎌野直人師	伊藤初師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
校	鎌野直人師	伊藤初師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師
正	鎌野直人師	伊藤初師	井上義実師	石田高保師	石崎光則師	田中裕明師	後藤健一師	田中愛子師	後藤栄子師	松浦あん姉	松浦あん姉	中島啓一師

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、組版の松木共栄印刷、印刷のプリントパックに心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 牧羊者 二〇二二年度 Ⅲ巻

発行所 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三-三-一九
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

印刷所 株式会社プリントバック

* 聖書 新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会 許諾番号 4-2-17500号